
IS インフィニット・ストラトス～偶像～

西原 はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス〜偶像〜

【Nコード】

N 6 2 5 7 R

【作者名】

西原 はじめ

【あらすじ】

この物語の主人公は織斑千冬さんになります。

IS生産工場が謎の機体に爆撃され大きな被害が出る事件が発生。急遽ISに詳しい千冬が対策室に呼び出されたそこで調査を依頼され同時に陸上自衛隊、第6部隊隊長の稲嶺がパートナーに選ばれ調査に繰り出すのだが…。

この物語はISの活躍ではなくISと言う物に振り回される人々

の様を描くものです。なので一夏の登場などはほとんど無いと考えてください。ラブコメ路線ありません。（＝一夏達はほとんどでないと考え下さい）

00話 再会（前書き）

この小説は、あらずじに書いてあるようにISが活躍する物語ではなく、“IS”と言うものを巡って振り回される人々の様を描いたものです。主人公も千冬さんで一夏はほとんどでないと考えてください。

なので、ラブコメが読みたい人は引き返してください。

00話 再会

5月15日（日曜日）午後1時30分。

織斑千冬はインフィニット・ストラトスISが世界に与えた影響と今後の課題と言う講義に参加していた。そこには同僚の山田真耶も出席していた。それだけでなくかつてのモンドグロツソ（IS世界大会）の元選手や現役選手も講義に参加していた。千冬はどうかと聞かれればペン回しをかましている。知っている情報ばかりで飽きているのだ。

「織斑先生…。失礼だとは」

「知っているものばかりでな…。飽きた」

「次、先生の番なんじゃ…」

「おっと、そうだったな」

『それでは、次に織斑千冬より発表があります。織斑先生お願いします』

講義を行っているホールで唸然とした声と同時に聞こえてくる期待に満ちた拍手。ご指名を受けた千冬はその場から立ち上がりホールの壇上に向かって歩いていった。

『IS インフィニット・ストラトス』偶像』

「なかなか良かったですよ。織斑先生」
そう言われたがこれでうつつを抜かさないので織斑千冬の魅力である。

「山田先生。私はまだ資料等を取りに行かなければならないので先に学園の方に帰っておいてくれないか。後で追い付くと思うので。もし追い付かなくても学園で会える」

「分かりました。では失礼します」

「ああ」

彼女は軽くお辞儀をすると千冬から離れて丁度到着したエレベーターに乗り込んで姿を消した。それを見送った千冬の方は彼女の姿を久々に見られた事あって多くIS操縦者の女子から次々と声を掛けられては軽くあしらい、その行動がまた彼女達の反応をぐっと上げることを千冬は無自覚に行っている。今回の講義の資料を1部ずつ貰い彼女もエレベーターが到着するのを待つ。言い忘れたがこのホールがあるのは高層ビルの50階。高速エレベーターでもかなり時間がかかる。

到着を示す赤いランプと鈴のような音がなるのと同時にエレベーターの重たそうな扉が左右に開く。中に入りすぐに1回ボタンを押すと“閉”のボタンを押す。

「待つて待つて！」

「??」

急に声を掛けられ咄嗟に“開”のボタンを長押しして扉が閉まるのを食い止めてその声を掛けてきた人物はエレベーターに飛び込んできた。それほど急いでいたのだろうか？その女性は千冬と同じ年くらいで、特徴はと聞かれれば薄紫色のセミロングでそれならに長い足と均整の取れた小顔。

「ハアハアハア…、ハア」。中々声掛けられなくて困ってたんだよ。千冬」

「お前は相変わらずだな。レイル・フォッセン」
エレベーターに飛び込んできた女性、レイル・フォッセンの名を呼ぶとエレベーターの扉が重々しく閉まり下へと下っていった。

「本当に久しぶり。あなたがモンド・グロツソを放棄しちゃった時はどうしたのになって思ったよ」

「お前はそれで繰り上げて銀メダルだったか？」

「うん」

エレベーターの展望から青々とした東京の海が広がる。レイルの方はその展望を見下ろし千冬の方はエレベーターの指示板をの方に顔を向けている。要するに2人は背中を向け合っているのだ。

「今でもレイルは現役なのか？」

「まあ、未だに夢は捨てきれないよ。千冬」

「何だ？」

「また今度試合でもどう？結構強くなったつもりなだけだなあ」

「……、悪い。私はもう引退してるんだ」

「あう、でも久々に話せてよかったよ」

「私も。かつてのライバルと久々に話せてよかったよ」

『1階です』

「侘びと言っちゃなんだが、食事でもこれからどうだ？」

「ゴメンね……。こっちが人待たせているんだ。それにそっちも同僚の先生待たせているんじゃないの？」

「見てたのか？」

「まあね。じゃあ私はこれで」

1階の広いフロアでレイルと千冬は別れを告げてレイルの方は急ぎ足で1階のフロアから脱出する。千冬の方も彼女が出て行った自動扉に向かって歩き始めた。

その時、右隣で流れているテレビから慌しそうなニュースキャスターの声が聞こえてきた気がする。

だが、それを耳に入れず彼女は自動扉から出て行った。

『――、番組の途中ですが速報です。〇〇市に拠点を置くIS製造ラインで黒煙が上がっていると警察に通報がありました。この黒煙の原因はまだ分かっておりません』

01話 IS特別対策室調査員、立川俊宏

「ねえ、昨日のニュース見た？」

「見たよ！日本で一番の生産ラインだったんでしょ？」

「私達の専用機どうなっちゃうのかな？」

日曜日の各メディアが伝えた“IS生産ライン爆発事故”は日本中に駆け巡り国内だけではなくそのニュースはアメリカやドイツ・フランスなど、IS待生を持つ国々で大きく報道された。技術力を持ちなおかつIS開発者の出身国の事故は格好の報道ネタになるからだ。

「お前ら、報道ごときで何をそう慌てている？」

「しかし、織斑先生……」

「お前らは冷静と言っ言葉を知らんのか？それを実行できなければISとの馬は絶対に合わないぞ」

「はいっ」

現金な生徒達である。千冬に対して憧れの女性像として見ている女子生徒達は数知れず、その上千冬のそのクールな容姿にクールな言動で心を鷲掴みにされている。当の本人はそれが当たり前だと思っているから余計にたちが悪い。

「それではSTを……」

「織斑先生」

STを始めようとしたところで副担任の山田が教室に入室して来た。少し息が切れている様だから職員室から走ってきたのだろうか？

「先生にお客様ですが……」

「私に？」

「はい、STは代わりに私がやっておきますので。応接室でお待ちしております」

「お呼び立てして申し訳ありません。織斑先生」

「こちらこそ、お待たせしてしまつて」

千冬を尋ねてやってきたその客人は年齢で言うと40代位の男であつた。わざわざ千冬を呼びつけた事に対して謝罪している位だから、そう悪い人物ではないようだ。少なからず礼儀はわきまえている。

「とりあえず、座りましょうか？」

向かい合わせに置かれてゐる小豆色のソファにお互い座ると来客の男は着ているスーツのうちポケットを探る様な仕草を見せて探して、当たつたものを千冬に渡す。この男の名刺のようだ。

「私わたくしこつ言つ者です」

「IS特別対策室調査員の…、立川たてかわさんですね？」

「そうです。先生はニユースはご覧になりましたか？」

立川（下の名前は俊宏としひろ）と名乗つたその人物は千冬にそう質問を投げかけてきた。

「ニユースと言うと、あの生産ライン爆破事故の件ですか？」

「フツ…、事故ですか。まあメディアはそう伝えていきますね」

「意味がよく？」

「失敬。私は今回の事故の調査を任された調査員の一人です。昨日の深夜に急遽作られた調査部なのですがね」

「その立川さんが、私に何か御用でしょうか？」

聞かれると立川は上下左右に視線を移して部屋中を見渡す。視線を動かすのを止めて再び千冬に視線を戻す。

「この部屋は、我々以外の人間に聞こえることは無いですかね？」

「例え聞こえたとしても秘密は守るつもりですが」

「また失礼。では本題に移させていただきます。単刀直入に申し上げますとあなたのご協力が必要です。織斑千冬さん」

「…それは何故でしょうか？」

しばらく、苦虫を噛んだような表情を浮かべた立川であつたが、すぐに落ち着いた表情に戻して千冬の質問に答える形で話を続ける。

「我々は…、今回の爆破は第一級のテロだと考えております」

第一級のテロ。その予想だにしない言葉に千冬は冷静に聞き流すが、内心では少しばかり動揺を覚えている。なぜなら、無人ISによる暴走事故は何件か過去にあったが今回の場合は生産の段階で起こったしかも意図的に仕組まれたテロだからだ。

「しかし、その確たる証拠は？」

「爆破当時、工場に隣接している社員寮の監視カメラが識別不能の影を捉えていたのですが…、この部屋にデッキなんかはありませんか？」

立川の手元には彼が持ってきたカバンから取り出されたと思われるビデオテープが握られていた。

「…、分かりました。視聴覚室を開けてみます」

「お願いします」

「生徒達が来る可能性はありますか？」

「今日は、そういう授業はないし、何より作られたは良いものの、滅多な事が無い限り使われない教室ですから大丈夫かと」

視聴覚室の電気をつけて立川を室内に招きいれ千冬も扉に鍵をかけて入室する。

「よく分かっていらっしゃる」

「オーディオ機器をセットするので少し待ってください」

「分かりました」

ビデオのセットが終了しテープが再生される。再生されたテープの出だしは工場の屋根が映っていた。

時刻は、13時12分38秒。

「事件が発生したのは13時17分の26秒ですが、そこまで飛ば

しますか？」

「このままで」

ビデオが映し出していた映像は変わらない平穏な光景。立川の話によるとこの監視カメラのデータ以外はデータもろとも爆破の衝撃でダメになっただけらしくこの映像もかなり画素数が低いがためにあまりハッキリと動く物や看板の文字までは見えない。動きも5秒おきのコマ撮りの為カクカク動いている。

「もうすぐです。コマ撮りでなければもっとハッキリ見えるのでしようが……」

その途端に工場の屋根から赤い光と共に黒煙が上がるのが映し出されていた。黒煙が上がって数秒後に立川は一時停止を押して千冬に問題の影の位置を示す。

「ここです。分かりますでしょうか？」

「……………、よく見えないな……」

「まあ、当然でしょうな。我々もこれを見つけるのに数時間も掛かった。拡大した写真を用意しています。ご覧下さい」

カバンから取り出した拡大写真を千冬に提示し、指をさす。

「この影です。本当はもっと拡大したかったのですがこれ以上拡大すると見え辛くなるのでこれが限界でした。何か分かるでしょうか？」

「IS」

「そうです。識別不能の機体です。それこそ戦闘機やヘリの可能性もありますがこの形から推測するにISが一番無難でしょう」

「私にどうしろと？」

「調査に協力していただきたいのです。IS開発に携わったあなたなら何かと分かると思います」

「…、いつから？」

「今日から調査に参加してほしいのですがそちらにも事情があるでしょう。5日後にまた伺います」

「……………」

02話 出迎え

立川が去ってから5日が経った。

千冬はその間に入っている授業は繰り上げてこなして10日ほどの休職願（教師には調査に行くと言明・生徒には海外でISの臨時指導と説明）を提出した上で立川が指定した場所に赴いていた。

「織斑千冬様ですか？」

「??」

突然若い女性に声を掛けられてその方向に視線を向けると声と同様若い女性がそこに立っていた。容姿は真つ黒なロングの髪とビシッと決めたスーツ姿。そして青い瞳と来ている。

「お迎えにあがりました。さあ行きましょう」

「ああ…、あの立川さんたてかわは？」

「立川は今朝、調査にかり出されたので代わりに私が迎えに。駐車場場で車を待機させているので」

「名前は？」

「デヴィスです、アリサ・デヴィスです」

「では、デヴィス。行こうか？」

「はい。こちらです」

アリサの行く方向に千冬も付いてゆき駐車場に向かう。するとそこに止めてあったのはいかにもと言う感じの真つ白なリムジンであった。長さとしてはそれほど長さではないもののそれでも高級感と同じ駐車場で異彩を放っていたのは言うまでもない。千冬が持ってきた荷物はトランクにデヴィスが詰め込み千冬はさっさと車内に乗せられてしまった。夏真つ盛りとあつて車内はエアコンがガンガンに効き駐車場のアスファルトからは陽炎かげろふが立っていた。トランクが閉まる音が聞こえデヴィスは運転席に乗り込み、リムジンは駐車場から出発した。

「これからどこへ向かう？」

「特別対策室が置かれているＩＳ管理センター日本支部です」

「あそこか…。一回しか敷居を跨いだことのない」

「はい。日本で活動しているＩＳの固有管理を一手にまかっているいわば管制塔のようなものです後１時間ほどで到着します」

「１時間か…。結構長いな…」

「そうですか？」

「……………」

それにしてもあの立川という男。どこか気に入らないな。人を詠んでおいて自分は姿を現さない。現地で調査と言う割にはかなり早すぎている気もする。現地に行ってもまだ何も証拠など掴めないだろうに。

リムジンの窓から見える景色は遠く虚ろに見えるＩＳ学園とそれを結び付けるモノレールの軌道。再開発で美しくなった街並みと木々で出来た並木道。そして青く広い太平洋であった。

「少し、眠るとするか…」

「では、到着したらおこしますね」

「頼む…」

「おきてください。織斑様。もうすぐ到着致しますよ？」

「ん…。もう着いたのか？」

「はいっ、到着しました。荷物をトランクより出しますので暫くお待ちを」

「分かった」

背伸びをして眠気を飛ばす。どうやら駐車場にリムジンを停めたら

しく窓からは建物も見える。その建物は真つ白で清潔そうな壁をし天井から機械的なアンテナが立っている。建物を見つめっているとドアが開いた。デヴィスがトランクから荷物を取り出してドアを開けたのだ。無言で車から出て行きデヴィスから荷物を受け取る。

「ではこちらへ」

「特別対策室本部」と書かれた部屋の扉を開くと真つ黒なソファとガラス板のはめられたテーブルが置かれていた。そしてそのソファに1人の女性が座っていた。年齢は千冬と同じ年くらいだろうか。

「お待ちしておりました。織斑千冬さん」

「何だその呼び方は？他人行儀だな？お前のその性格は相変わらずと言った所かな？エミリア・テルビン」

「フフフ、久しぶり千冬。あなたこそそういうクールな正確は相変わらずと言った感じかな？」

「ふっ、第一回のモンドグロッソ銀メダリストが何故こんな所に？」

「まあ、座って座って」

ここでまた思わぬ再会を果たしてしまった。エミリア・テルビン。第一回モンドグロッソ銀メダリスト。

要するに最後に千冬と戦ったIS操縦者の選手と言うことだ。

「で、さっきの質問の答えを教えてもらおうか？」

「…、私がこの室長さんなのだよ？これで分かった？」

「まあな？私を雇った立川という男もお前の差し金つてわけか？」

「立川？差し金つちゃあ差し金だね。立川は特に頭が切れるから調査委員に特別に入っているのよ」

「男が入っているからおかしいと思っていただけ、そういう事が…」

ISと言うのは女性にしか反応しない（千冬の実弟である一夏を除く）。ISの調査委員会で今回の事件を調べるに於いて中年の男が混ざっているのがどうにもおかしいと思っていたがそういう事だっ

たか。

暫くの間、沈黙が続いたがエミリアが話を切り出す。

「……、さあて本題に移りましょうか？あなたが呼ばれ理由はご存知でしょうか？」

「IS開発に携わった人間だから、だろ？」

「そう。あの篠ノ之束しののたはねと一緒にIS開発に携わったあなたならもし仮に今回の事件の機体を捕まえる事が出来たならどこで製造されたものか、分かるでしょう？」

「知っている限りならな？」

その時、トントンと調査室の扉をノックする音が聞こえてくる。

「どうぞ？」

「失礼します」

入ってきたのは野太い声の割には、かなりひよろそうな声を持った中年の男。年齢的には40代ちよつとのいわゆる“おっさん”。背の高さは180センチほど。千冬がその男を見つめているとエミリアが彼を千冬に紹介する。

「陸上自衛隊第6部隊隊長の」

「稲嶺いなみねです」

「織斑千冬です」

自衛隊隊長の稲嶺と名乗った彼に千冬は自己紹介で返す。互いに名前を確認したところでエミリアが説明に入る。

「千冬、これから調査するに当たって、この稲嶺があなたのパートナーとして行動を共にします。稲嶺、織斑先生の事頼むわよ」

「はいっ」

威勢のいい返事の割には、稲嶺の表情は重たそうな顔をしていた。エミリアは無自覚で彼のことを“稲嶺”と呼び捨てしているがきつとそれの事ではないのだろうか？何故年下に苗字を呼び捨てにされなければならないのかと。

「それじゃ千冬。早速だけど稲嶺と一緒に調査現場に行ってくれな

い？そこには立川も居るから」

「分かった。それじゃあ行きましようか。稲嶺さん」

「はい、それではどうぞ」

調査室が置かれている部屋を出て行き廊下に出ると稲嶺はすぐに“ハア”と大きなため息を漏らして頭を掻く。千冬がいるのに関わらずである。

「稲嶺さん」

「何ですか？」

「嫌なら嫌とハッキリ言った方がよいのでは？」

「あはっ、気付かれていましたか？」

「そりゃ、ああ露骨な表情では」

「…、いいんですよ。慣れた事ですしね。行きましようか？今度は普通の車ですが」

普通の車と言うワードを出した途端にまた彼はしょぼんとした表情を浮かべる。きっと行きはリムジンで迎えられた千冬に対しての申し訳無さから来ているのだと思う。先を歩く彼を千冬が引き止める。

「あのっ、稲嶺さん」

「はいい？」

「なぜ、陸上自衛隊のあなたが動いているのですか？」

「…、取って食われちゃったんですよ、ISに」

「へっ？」

03話 兵器としての“IS”

“取って食われちゃったんですよ、ISに” 稲嶺のその言葉に少し疑問と驚きを持つ千冬を横目に彼は歩きながらエレベーターの「↑」のボタンを押してエレベーターが到着するのを静かに待つ。

「稲嶺さん」

「ん？」

「気になるのですが。先程の話」

すると、タイミングを見計らったの様にエレベーターが到着して扉が開いた。とりあえずはその鉄の箱に乗り込みエレベーター内では話せないと稲嶺が言った為、車の車内で話をする事になった。

駐車場まで行くと青色の普通乗用車が駐車場にポツンと駐車されており稲嶺は憂鬱そうに頭を掻く。どうやらこの車は稲嶺個人所有の車らしい。

「つくづくすみませんね」

「いやっ、別に構いませんが」

「ハア」……

「ため息が好きなんですネ」

「すみませんね……。じゃあ乗ってください」

千冬は運転席の真後ろに座らされ（上座を意識しているのだと思う）すぐに稲嶺も運転席に座ってシートベルトを締めてミラーを調整した後エンジンをかけて左右をしっかりと確認した。

「では、出発しますよ」

出発してから5分ほど経ってからさつきエレベーター内で交わされた約束を千冬から切り出す。

「さつきの話。聞かせていただけますよね？」

「…、エアコン。強くしていいですか？」

「良いですが、涼しくなったら弱くしてくださいよ？」

「分かっていますよ」

カチカチとエアコンを調節する音が聞こえ、エアコンの送風口から送られる風の音が強くなり風そのものも強くなった。ハンドルを両手で稲嶺が握りなおすと彼は静かに話し始める。

「俺はね、今までいろんな国に行きましたよ。エチオピア、マレーシア、エジプト、チリ、メキシコ、南アフリカ共和国、中東各国……、そこで我々は“IS”が兵器として使われている国をいくつも国境跨いで見てきた」

「でも、兵器としての使用は“アラスカ条約”が」

「世界200以上の国と地域、それら全てがその条約を守っていると思いますか？」

「……………」

アラスカ条約、正式名称は「IS運用協定」またを「IS協定」とも言う。

軍事転用が可能になったISの取引などを規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めた協定。

この条約は平たく言えばISを軍事的に使用してはならないという事だ。事実、ISという物は現在スポーツの競技としてしか利用されていない。その“協定”を破るといのは世界を巻き込む戦争の開戦を意味していることに等しい。

「表面はIS選手の育成、だが裏ではISを軍事的転用しようとしている国なんてざらじゃない。戦場で我々が見たのは明らかに戦車やそう言った機械の破片ではなかった」

「けど、それをISと結びつけるのは早過ぎないですか？」

「……………」それは我々自身そう何度も思いました。しかし別の戦場に向かう度に見せ付けられてしまうのですよ。ISに乗った若い女の

子が親を無くした孤児を助けているのをね…。この意味分かりますか？」

「……………」

そう千冬に尋ねると稲嶺はブレーキが掛けて青々とした車両を停める。赤信号になったからだ。停めると彼はポケットからタバコを取り出して口に咥えた。

「いいですか？」

「どうぞ……………」

目の前の横断歩道を歩く赤色や黒色、青色のランドセルを背負った子ども達を目で見送ると、タバコに火をつけ窓を開ける。タバコの先端から上がる灰色の煙、そして赤く光る火。赤信号が青信号に変わりタバコを吸う稲嶺は再びアクセルを踏む。千冬は黙りこくっていた。

「あの…、やっぱり止めてください。タバコ」

「あつ…、分かりました」

千冬が黙りこくって出した第一声は“タバコ止めてください”であった。ハンドルを片手で握り直し、もう片方の手で灰皿を引き出してタバコを灰皿に押し付ける。

「織斑先生…どうお思いですか？」

「私は……………」

「俺はこう思うのですよ。“戦争”はもう始まっている。ただ気付いていないだけだ。日本人は他人を犠牲にして得た“平和”を踏みながら生きている。その出来上がった“平和”の上で我々はコメを食い、肉を食い、物を買ひ、服を着ている」

トンネルに差し掛かりトンネル独特のオレンジ色のランプが車内を照らす。

「でも稲嶺さん。その平和を次の子ども達に残すのが私の役目です。そしてISの使い方を正すのも」

「……、それは全面的な協力と捉えてよろしいのですか？織斑先生」
トンネルから脱出し真夏の日差しが一気に車内に突き刺さる。千冬

がそのハスキーヴォイスで稲嶺に静かに応える。

「さあ、どつでしようね…?」

04話 爆撃現場

「先生、アレが問題の現場ですよ。あの白い車が立川さんのだ」

「はあ…、もう着いたんですか？」

「正確には、ここから5分ほど歩くんですよ。爆撃の衝撃が大きすぎて周辺の道路がダメになっちゃたから」

すると、立川のものだという白いワンボックスの後ろに車を止めてエンジンを切って扉を開けて熱く熱せられたアスファルトの上に稲嶺は足をつける。千冬も自分で扉を開けて同じ道路の上に立つ。稲嶺の方を見ると背伸びをしている。長いこと運転していたから少し疲れたのだろう。千冬もつられるように背伸びを決めて気を引き締める。彼女が車外に出たことを確認するとすぐに車の鍵を閉める。その鍵はポケットに突っ込み、代わりにそこから真っ白いハンカチを取り出して汗を拭う。その時の稲嶺はまるつきり“中年のおっさん”であった。

「にしても、今年は暑いなあ…。まだ5月の中旬なのに」

「毎度の事だと思いますがね、少なくとも私は」

「まあ…、高温多湿地域に比べればまだマシですかね？さあ、行きましょうか？」

「ええ」

車の横を歩き問題の爆撃があつた工場までの道を歩き始めた。すぐに立ち入り禁止のテープと監視員に遭遇したが稲嶺の顔を見るとすぐに通してくれ彼の紹介で千冬も自由に行き来する権利を得る事が出来た。立ち入り禁止区域の内側はフタを開けてみれば実に酷い有様であつた。本来車が通るべき車道のアスファルトは所々隆起し一部では陥没、穴ぼこだらけ。工場周りに立てられている古そうなマシンシヨンは窓ガラスがほとんど無くなっていた。爆風の影響を物語っているに相応しい。

「本当に酷いですね…」

「でしょ？だからあの立川さんが持つてきたカメラの映像が生きていた事に今でも半信半疑で…」

「……、私も同意見です。彼は何者ですか？」

「さあね。でもエリートなのは間違いないでしょうね。よつと」

千冬の先頭に行く彼は大きく陥没したアスファルトの穴を飛び越え、後から続く千冬は穴に沿って平らな道路を歩いて稲嶺の背中を見失わない様に追う。

「稲嶺さん……。あなたは、どうしてここに？」

「???」

千冬の質問を聞いて稲嶺の足が止まる。後ろを歩いていた千冬は彼にすぐに追いついて横に並ぶ。横並びで歩く行為をやめている千冬と稲嶺。

「あなたは、自衛隊員なのにこんな所において大丈夫なんですか？」

「……、大丈夫ですよ。どうせ私のところに指令が入る事なんてそう滅多な事が無い限り……。うちは自衛隊内部では島流し同然なんですよ。部下が不祥事ばかり起こしてしまつてね」

「戦場に行ったというのは？」

そう聞くと再び稲嶺が歩き始める。その時の天候は青空が目立つ快晴。太陽の白い直射日光が降り注いでいる。

「あれは、戦場だからさすが我々も参加しなきゃいけない。なにせ戦場で死に掛けている人を助けたり物資を送るのが指名ですからね。現場での」

「……、それであなたはなぜここに？肝心な質問の答えを聞いていない」

「ご指名だったんですよ。上からの……。『島流し同然なのだからありがたく思え。しっかりと働け』ってね。私の部下は優秀な連中ばかりなのに……。今は多田副隊長に全てを任しています。何かあったら電話するようにだけ言って」

「……、そちらも大変なのですね。私も生徒を落ち着かせるだけで苦労しますよ。それに、私には弟がいますが育てるのも一苦労したく

らいですよ…。親無しですから」

「最近ニュースでやっていましたね？ “世界で初めてISを動かした男”とか何とかで」

「ええ、おかげであのバカは回りにちやほやされて」

「はははっ、ソイツは大変だ」

「本当に、あの天然女垂らしの唐変木ときたら生徒達だけに飽き足らず、教師まで陥れて」

「……、ようやく笑いましたね？」

「へっ??」

稲嶺が突然話しかけて、唯一の弟であり肉親である“織斑一夏”おりむらいちかの話に夢中になつていた千冬は少し驚きぽかんとした表情を見せる。

「やっつと、笑った顔を見たと言うことですよ。その表情から察するに一夏君に結構期待しているんでしょ？」

「違いますよ」

稲嶺の発言を彼女は即否定した。すると、彼は大笑いを決める。

「何がおかしいのですか？」

「別にい??さあ、見えて来ましたよ」

「……」

・ 問題の爆撃現場が。

問題の爆撃現場に到着すると稲嶺が先に中に入り千冬も足元に注意ながら中に足を踏み込む。工場内部は最初は電気系統がやられていくらしく暗かったがその暗い場所を抜けると一気に明るい所へ出た。光源は屋根に大きく開いた穴から差し込んだ太陽の光であった。そのおかげで大きい空間の工場内は隅々まで見渡すことが出来た。足元に転がっている機械類はそのほとんどが真っ黒に焼け時々血生臭いにおいがした。思わず掌を鼻と口に当てて臭いを防ぐ。

「立川さん」

「ああ、稲嶺さんか。それに先生も」

「どうも」

「すみません先生。本当は私がお迎えに上がる予定でしたが」

「いいですよ。別に」

「調査はどうですか？」

「全く何も拳がらんよ。探しても探しても出てくるのは機械の破片か、黒焦げの炭くらいさ」

「そうりゃあそうでしょ。なにせ事件があつてまだ何日も経つてないのに…、こんな血生臭い所に女性連れてくるこつちの気持ちにもなつて貰いたいな…」

「……」

赤い夕陽が車内に差し込む。現在は稲嶺の車に乗っている。彼の青い車の前を立川の車が走っている。

「…結局、何も出ませんでしたね」

「稲嶺さん」

「はい??」

立川から聞いた話なのだが稲嶺の返事は毎度毎度“はい??”の“い”はつり上がった感じの返事らしい。千冬と出会ってから返事や先程の返事も語尾がつり上がっている。どうやら彼の癖らしい。そんなどうでもいい事を考えながら彼に話しかける。

「稲嶺さんは、私に気を遣わなくて良いですよ。私は年下ですし」

「…困ったなあ………」

「別に良いですよ。それに“織斑先生”は生徒と同僚だけで十分です」

「…、それじゃ“千冬さん”と呼ばせてもらっていいですか?そちの方が呼びやすいし親しみやすい」

「…いいですよ?」

「……」

暫くの沈黙の後前の立川の車を追いかけてながら運転している稲嶺が千冬に質問を投げかける。

「それで千冬さん。どう考えてるの？」

「何を？」

「今回の事件の全容を」

「どうでしょうね。それこそ私が聞きたい位です。なにせ、何の手掛かりも見つからない位に滅茶苦茶に破壊されていましたし」

「でしょーね…。あそこまでやる必要があったのだろうかね…？」

「確かに……」

特別対策室が置かれているIS管理センター日本支部の駐車場に到着すると車から降りた千冬に稲嶺が話しかけてきた。

「千冬さんは…、どこに泊まるの？」

「何かホテルを用意していると聞いたので」

「そうですか…、では俺はここで」

「はいっ、ではまた明日」

05話 戦争とは何か？平和とは何か？（前書き）

題名を変更しました。

05話 戦争とは何か？平和とは何か？

千冬が特別対策室のメンバーに加わってから3日後。

IS管理センター日本支部の建物の前にある駐車場に千冬や稲嶺、立川たちが居た。朝早くからこれから調査に向かうのだ。

「いやあ、いい天気だ。ねえ千冬さん」

「本当に、昨日の大雨とは大違いですね」

「それじゃ、織斑先生。私達は現地に向かいますので。また後^{のち}ほど。何かありましたら」

「俺の携帯に電話して」

「フツ…、分かりました」

千冬は映像解析の名目で別のメンバー（もちろん女性）2人と出て行った。彼女の世話役である稲嶺の方は再び現地調査を立川と一緒にする様に言われ現地に向かっていた。

「そいじゃ、立川さん。運転よろしく」

「分かっているよ。助手席に乗って」

今日は2人だけで現地に向かうので車は一台だけになりその車は荷物も多く詰める事の出来る立川の車で

行く事になった。運転は車の所有者でもある立川、助手席に稲嶺が乗り込みすぐに立川の車は駐車場から出発した。

「…、それでは、私達も行くとするか」

「はいっ、ではこちらへどうぞ」

「吸っていい？」

「良いですよ。私も吸っているので」

立川の許可を貰い助手席に座っている稲嶺はタバコを口に含むとすぐに車備え付けのシガーライターで火をつける。すぐに煙が車内に

立ち込め稲嶺は急遽ドアの窓を開けて口に溜まった煙を吐き出す。

「プハー」

「いい吸い方だ。肺活量が違うんじゃないのか？」

「…、愛煙家暦１９年だからね」

「私は２４年目だよ。値上がりは痛いね」

稲嶺になにやら諦観に笑みを浮かべる立川。彼の笑みを見て視線を顔から彼のブレーキ・アクセルを踏んでいる下半身に落とす。すると膝の上になにやら茶色の紙の端の様な物が微妙にはみ出ている。

「…、ちよつと、現地に行く前に話す事があるんじゃないの？立川さん」

「フツ…、それはあんたも同じじゃないのか？」

「…、お互い包み隠さず、“真実をさらけ出そう”ってか？」

「寄り道でもするかい？」

「もうしてるでしょ？」

現地に向かう途中で道はずれ立川の白い車は陸上とＩＳ学園とを結ぶモノレールの太いコンクリート製の橋脚の下に止まっている。人気はほとんどなく時々モノレールの車両が頭上を通るくらいだ。橋脚の脇には小さな川が静かに流れている。川面に太陽の光が反射し車の天井に水の模様が浮かび上がる。稲嶺は再びタバコを吸いつられる様に立川もタバコを吸い始める。

「またモノレールか…」

「さあ…、じゃお互い話そうか。立川さん？」

話を切り出したのは助手席でタバコを吸っている稲嶺。話を切り出され立川は驚いた様子もなく備え付けの灰皿を引き出してタバコの灰を落としタバコも押し付ける。灰皿を押し込めると膝の上に乗せている茶封筒を取り出して稲嶺にそつと渡す。

「やっぱ、茶封筒だったか」

「…コイツは、事件発生前の工場の衛星写真と事件直後の衛星写真

だ。とりあえず中を見てもらおうか？」

「もう、開けているよ」

「1枚目は、爆撃を受ける前の写真。2枚目が爆撃後の写真だ」

「ん??」

「分かったか?それに写っている影を」

「……、よく丁度良く」

「秒単位で撮影できる最新鋭の衛星写真だが、この写真は誰が分かるか?」

「…、米軍か」

「米軍は何らかの形で今回の爆撃の内容を傍受していたんだろう。発生日時そこを飛んでいた衛星が撮影したのさ。その時偶然この黒い影が写った。それこそ細かくは分からないがな」

「このこと他には?」

「まださ。調査から帰った時に見せるつもりだ。…さあそっちの報告も聞かせてもらおうか?」

その時、モノレールが車の頭上を通り過ぎていった。

「スクランブル?」

「ああ今朝末明に成田空港のレーダーが国籍不明・コールサイン不明の“影”を映して航空自衛隊のレーダーにもそれが映ったらしい。が困った事にソイツの影を追いかけたF-18G2機のパイロットによるとソイツは戦闘機にしては偉く小さかったとよ」

「ISか?」

「残念ながらそこまでは分からなかったらしいよ、パイロットもそこまでは詳しくなかったらしいし、なにせ当時の視界状況は最悪だったらしいから。その影の高度も妙に低かったらしいし」

「昨日は大雨だったのんな。しかしその話はニュースでは一向に

報じて無いぞ」

「スクランブル騒ぎを起こしている割には相手を取り逃がした責任を誰が取ると思うよ？」

「だよな…。しかし、こうまで騒がせておいて奴が打ち込んだのはこの工場1箇所だけと来ている」

「そこなんだよなあ…。もしこれがISを狙ったテロならば日本の工場以外にもフランスにも他にもあるし…」

「こう言うのは考えられないか？IS開発者出身国だけを狙ったのなら」

「そうだとしたらなぜあの工場だけなんだ？相手さんは死者は1人も出していないぞ？重傷者は何人も出たが…。それにIS目当てならなんでISを使つて爆撃なんかしたんだ？」

「ISを皮肉っているのならどうだ？例えば、ISで人生が狂わされたとかね…」

「……、それは俺の事じゃないの？」

稲嶺もフィルターだけになったタバコを携帯灰皿に落とすと深く助手席のイスに座り込む。立川に茶封筒を返してさらに深く腰掛ける。

「今日は、どうする？」

「…、工場の裏つて、大きな運河が流れてたよね？衛星写真見ると」

「ああ。あの日以来それこそ全く船舶は通つてないがな」

「一回、通つてみるかい？」

「無駄だと思うがな」

モノレールの橋脚下に止まっていた立川の白い車はエンジンをかけ走り始める。

工場裏の運河で立川たちはエンジン付きのボートを借りて乗り込み工場まで急いで近付く。裏側から見るIS工場は錆付いたエアコンの室外機が何機も設置されており表とは想像しえない汚さだった。

「エンジン切つて」

「切っていますよ」

崩れて操業を停止しているIS工場。室外機も全く動いていなく聞こえるのはそこを止まり木代わりに止まっているスズメか、運河の水の流れる音くらいだった。

「立川さん。世界の平和って何なんだろうね？」

「何をいきなり」

「ISって言う化け物モンスターが生まれて以来男の立場は極端に弱くなりいまや女性が世界の実験を握っている。そのモンスター製造工場の裏側がこうだとどうにも馬鹿馬鹿しいと思う。錆付いた室外機に、汚れきった外壁。平和って言うのはどういう物なんだろうね」

「それを言うなら戦争もまたどう言うものなんだろうか？日本が世界に敗戦してうん十年。それからの日本の成長は目覚しかったが日を重ねることに日本人は“戦争”と言うものを忘れて“平和”と言う言葉に責任転嫁しそれは今も続いている」

「それじゃあ、何？立川さんは犯人の考えに賛同するの？」

ボートは自然と運河の流れに流されて行き生産工場から次第に遠ざかってゆく。

「それは言葉に差異があるさ。私達が戦争を体験するにはまだ早いと言っているだけだよ」

「戦争に遅いも早いもないよ。俺がよく知っている」

「犯人の目的は戦争を仕掛ける事じゃないかな？そう思わないか？稲嶺隊長」

「……………」

「戦争なら大昔から始まっているんだよ。」

05話 戦争とは何か？平和とは何か？（後書き）

今回は、千冬さんではなく立川と稲嶺の会話の話にしました。

06話 監禁同然の監視 その1

ボートから降りて工場内部に入ると稲嶺の携帯電話が鳴り響く。携帯電話を開いて発信相手を確認する。発信者の名前は“武川武”たけかわたけるとその武川の電話番号が表示されていた。稲嶺の直属の部下で参謀的存在だ。(ちなみに、武という名前だが女)

「失礼…、はいっ」

「稲嶺隊長。今どこに居るのですか？」

「例の工場だけど…？どうかしたの？」

「…実はさつき幕僚長達の命令ですね…。IS学園を我々第6部隊で明日から監視せよと」

「えっ？どどういう意味それ？」

「一種の監禁ですよ。上は今回のIS騒ぎで日本の品位が下がったと勝手に判断して…、あっー！」

電話越しで話している武川の声は何処かイラついて聞こえる。彼女の癖で何か困り事があったり気に入らない事があったりすると頭をかきむしって“あーっ”と叫んだりするのだが、今それが電話越しでそうなっている。ちなみに第6部隊では結構有名な光景らしい。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃないですよ、それで“IS襲撃犯からの保護”と言う名目で我々に直接通達があったのですが…。配備が校門前とその他は校舎外…、これじゃまるっきりの監禁ですよ！」

「……、そのこと学園には？」

「さつき知らせました。もちろん上からの名目そのままに」

「……、滅入っちゃうよねえ……だって俺が世話役している相手はその学校の現役教師よ？どう説明すればいいんだよ……」

「その…、織斑さんでしたっけ？」

「そう……織斑千冬さん」

「それじゃ…、その人には真実を伝えたらどうですか？“我々の意

思ではない」と

「……………試すよ。じゃ」

電話を切り携帯電話をポケットに仕舞って立川の元に向かう。彼は待ちくたびれたとばかりにタバコを咥えて決めている。これから火をつけるようだ。

「ほらっ」

ただそれだけを言い立川の眼前にライターの火を差し出す。その日を見て立川は遠慮なくタバコの先端を火に近づけてタバコに火をつける。その姿を確認するとライターをその場に投げ捨てた。

「どうかしたのか？」

「嫌な上司を持ったってだけさ。明日から俺らは戦車やら何やら引き連れてIS学園の監視だ」と

「ソイツは大変だな…」

「分かる??」

「私もそういう経験があるからな…。それで先生には」

「…直接言っさ…」

口到人差し指をさして立川に見せ付ける。

「この口でね…」

5時間後、午後2時。

調査員全員が召集されて1回目の正式な報告会議が始まった。まず千冬たちの映像解析チームから会議はじまったが、映像解析の方はやはり限界があつたらしい。どんなにデジタル加工をしても限界を超えるとそれ以上は全く画質が向上する事はなかった。その映像解析の報告が終わると立川が稲嶺に先に車で見せた米軍提供の衛星写真を全員に配るといふ形でその報告が始まり、今回の衛星写真が会議の軸になる形になり1時間程度で終了した。

「以上です。米軍さんの方にはまた何かあつたら私の元に連絡をする様に言っております」

「そう…。ありがと立川。それじゃあ解散」

その言葉を聞き千冬の目の前に座っていた稲嶺はすぐに立ち去ろうとする千冬に小走りで近付いて“話がある”と言つて千冬と一緒に会議室を出て行つた。

「稲嶺さん…、話つて」

IS管理センター日本支部、給湯設備付き第一会議室

「コーヒーがいい？」

「構わないで下さい」

千冬を会議室のイスに座らせて稲嶺の方はコーヒーを1人分だけ淹れて千冬と対面して座りコーヒーを少しだけ啜^{すす}る。

「それで話とは？」

コーヒーを飲みながら質問をされてコーヒーカップをそつとテーブルに置いて話を始める事にする。

「…昼頃、部下に武川という者がいるのだけど明日の朝から俺達の部隊が“IS襲撃犯からの保護”と言つ名目で千冬さんの学園を監視する事が通達されたようなんだ…」

「それつてつまり…」

「監禁ですよ。IS操縦者を集めている学園の生徒達を監禁して次の行動をとめようつて言うバカな上のね」

「そんな…、10代の子ども相手に」

「俺も、すぐに上に電話して猛講義しましたよ。“子ども相手に何をするんだ”つて。上はこう言い返した。“子ども達を守るものであつて監禁ではない”つてね。監禁つてワードを出していないのに相手はそれを言つた」

「……、それで稲嶺さんは行くのですか？」

「行くしかないでしょうね…。サボるのもありでしょうが“子ども

を守らないで何が自衛隊だ”と言われそうですからね…。ところで、これは個人的なお願いなのですが、千冬さんは学校に一旦お戻りになつていただけないでしょうか？」

今までタメ口で話していた稲嶺の口調が急に敬語に変化する。それを気にせず千冬は質問を投げかける。

「それは何故？」

「コンタクトを取りたいんです。学園内部の状況とかを…。きっと生徒達は動揺やらなんやらでパニックになる生徒が出る可能性だつてある。そういう状況を報告していただけたら我々も対処がし易いのです。どうでしょう？」

「…………、分かりました。しかしこれだけはお願いです」

「????？」

「生徒達に介入はしないで下さい。彼女達の不安をそそるだけです」
「分かりました…」

稲嶺のコーヒーから湯気は消えその冷めたコーヒーを稲嶺は一気飲みをしてその場から立ち去った。

残された千冬は黙り込んだまま会議室の窓から見える全く変化のない景色を眺めていた。

『東京都内に住む都民の方をお願いします。この放送は非常に重大なので聞き漏らす事無く聞いてください。政府は今日IS生産ラインの事故を事件として捜査をすることを発表しました。そして政府はIS操縦者が集まるIS学園を陸上自衛隊第6部隊を中心に生徒達の保護と言う名目で監視を立てる事を発表しました。監視に伴い第6部隊所属の90式戦車5台と軽装甲機動車5台ををIS学園の校門前に配備することが決定し午後10時より一般道路を利用いたします。道路規制を9時30分より開始いたしますので走行中のドライバーの皆さんは指示に従い運転してください』

「すげえ。本物の戦車だ」

「まさか、本当にIS学園に行くのかなあ？」

「はいっ、それ以上道路に入らないで下さい。非常に危険です！」

華やかな真夜中の街に戦車のキャタピラの音がむなしく響いていた
|。

06話 監禁同然の監視 その1（後書き）

作者は、IS学園の場所と自衛隊の車両等に知識がないためイメージで全てを書きました。ご指摘お待ちしております。

07話 監禁同然の監視 その2（前書き）

ラウラが出ます。

07話 監禁同然の監視 その2

『現在朝8時30分です。ご覧頂けるでしょうか？IS学園校門前で自衛隊第6部隊を中心に校門の見張りが1時間半ほど前より始まり学園の敷地内でも自衛隊員が装甲車の脇に立ち監視を続けております』

学園の頭上を報道用のヘリコプターが飛び去って行く。朝の7時からこの緊張状態が続いている。稲嶺は校舎が見える場所で自衛隊服を着こなして装甲車の車体に左ひじをのせて立っている。手には銃も何も握っていない。廊下から見えるだけあって生徒達に不安をそらせる訳には行かないのだ。

「稲嶺隊長。菓子パンです」

「おつ、サンキュー」

稲嶺に近づいた隊員が朝御飯代わりに菓子パンを彼に渡すと、その隊員はほかの隊員にも渡す為に稲嶺の元を立ち去る。すぐに菓子パンの入っているビニール袋を破いて軽くほお張る。

「これ、アンパンだ…」

1年1組（千冬が担任のクラス）

始業の短いHRで千冬は自衛隊が何故学園に居るのかという説明をしていた。教室の扉の近くには副担任の山田真耶が緊張したような表情をしながら立っている。

「以上だ。自衛隊員の隊員たちにくれぐれも迷惑だけはかけぬ様に。それでは1時間目の用意をしろ」

「マジ…?」

「怖いよね」

やはり生徒達は動揺を隠せないようだ。千冬の弟である一夏も少し驚いたような表情を見せている。軍人ぐんじんであり左目に黒い眼帯を付けているラウラ・ボーデヴィツヒ、その一人を除いては。ラウラは教室の窓から窺える自衛隊員を一瞥すると再び教卓の方に目を向ける。「静かに出来んのか？お前らは。それじゃ山田先生。後は頼んだよ」

「はい、織斑先生」

山田に仕事を丸投げすると千冬はさつと教室を後にして仕事を任された山田は授業の用意をするように促がす。しかしそれを否定するようにラウラは立ち上がって机と机の間を歩いて教卓に近づく。

「あの、ボーデヴィツヒさん？」

「大丈夫だ。すぐに戻る」

「そういう問題ではなく」

山田が返答に困っていると教卓から見て列の一番先頭に座っている千冬の実弟である織斑一夏が彼女に声を掛ける。もうすぐ授業だというのにラウラが立ち上がった事に疑問でも抱いたのだろう。

「ラウラ??どうしたんだよ」

ラウラは質問を投げかけた一夏の目と目を合わせてその質問に答える。

「安心しろ。教官と話をするだけだ」

「千冬姉と??」

一夏の顔は疑問符でいっぱいになっている。その表情を見たラウラの方は軽く笑うと一夏に顔を近づけると不意を突く形で彼の頬にキスをする。

「あっ——！」

キスの光景を目撃したクラスメイト達は啞然とした顔を浮かべ箒やセシリア、シャルはもはや抜け殻のように真っ白になっている。一夏とキスをした事がないからだ。

「お前は私の嫁なんだ。そう困った表情を浮かべるな。嫁の困った顔は見たくない。では行つて来る」

キスをされた当の本人は何が起こったか分からない様で固まってい

た。

廊下を歩いていった千冬の後ろから走って近付く足音が聞こえて彼女は後ろを振り向いた。その足音の正体は銀髪の髪を揺らすラウラであった。彼女は千冬と距離を縮めて立ち止まる。

「ボーデヴィツヒ。もうすぐ授業だろ？」

「申し訳ありません…。しかし教官、教えてください。あの自衛隊員たちは何者ですか？」

「何者??」

「我々の監視の割にはそれ以上に殺気立っている。彼らは本当に我々の監視が目的なのですか？教官」

「それを私が知る訳がないだろう？」

ごまかし廊下の窓から見える自衛隊員を見つける。その人物は千冬と面識がある稲嶺であった。装甲車の脇に立っている稲嶺はなにやらパンと悪戦苦闘している。

「分かったろ？私には分かん。さあ授業に戻れ」

「…、分かりました…」

「じゃあな」

千冬に取り残されたラウラは先程千冬が見ていた自衛隊員（稲嶺）をジッと見つめる。

『あの男が…、きつと隊長だろう…』

「はい、こちら稲嶺…、あつ千冬さん」

『生徒達の近況報告です。ごく少数ではありますが自衛隊の動きに気付いている生徒が居ます』

「やっぱ、いるか…」

『恐らく放課後、自衛隊に話しかける生徒が居ると思うので注意してください。特にラウラ・ボーデヴィツヒには』

「ラ…、ラウ…ラ？」

『私の生徒でドイツから来た者です。その彼女の特徴は低い背丈に長い銀髪、そして眼帯です』

「あっ…」

『どうかしました？』

稲嶺が“あっ…”と言ったのには理由があつた。彼が居るのは校舎の廊下が見える場所。その廊下にポツンと立っている銀髪で眼帯をつけている少女…。

「今日が合つた…切るよ」

「はいっ…」

稲嶺に電話を切られ階段を下りていた千冬の緊張感之余計に高ぶる。

『やはり、ボーデヴィツヒは違うな…。あいつだけが問題だ…』

07話 監禁同然の監視 その2（後書き）

「今日が合った…切るよ」

これは、視点切り替えとしてみてください。

08話 ラウラとの接触

ラウラはその後自分の教室に戻ってゆき稲嶺もその姿を遠目ながら送っていった。

「あの生徒は…、凄い威圧的だったな…ん？」

稲嶺の携帯電話がブルブルバイブを震わせている。出ようとしたりバイブの震えは無くなった。どうやら暫く鳴っていたらしい。液晶を覗いてみると“不在着信 1件”と表示だけがされていた。不在着信の相手は“立川俊宏”。立川の電話番号と名前が表示されていたので静かな装甲車の車内に乗り込んで掛け直す。

「もしもし、立川さん」

『どうしたんだ？二度も呼び出したというのに』

向こうの立川の声は少しばかりイライラしている。それを冷静に応える。

「こっちだって忙しいんだよ」

『どうだい？戦車やら装甲車繰り出して監視する気持ちは？』

立川の声を聞いて胸ポケットからタバコを取り出して口に咥えてすぐに火をつけて煙を吐き出す。煙を吐き出したらそれを人差し指と中指との間に挟んで携帯電話を持ち直す。

「気が滅入るよ、誰が悲しゅうて高校生の子どもを監禁しなきゃいけないんだ？」

『それは確かに分かるな…。ISの操縦者といえども相手は10代の子どもだもんな』

「で…、何か様？？」

『容疑者らしいのが上がってきたんだ』

「…本当か！？」

『昔、モンドグロツソで全選手の専用機に目を通した人物が居てね。元審判の人物なんだがその人物に例の航空写真を見て一目で分かった』

「誰のだ？んつ」

『どうした？』

学校のチャイムが学校の敷地内に鳴り響く。1時限目のチャイムが鳴ったのだ。つまり今から10分ほどの休み時間という事になるが監視をしている自衛隊員たちに休み時間など無い。

「なんでも無い、チャイムが鳴っただけだ」

『そうか…。それでその容疑者らしい人間なんだが…』

「電話じゃまずいだろ？」

『…分かつているじゃないか。そっちは何時ごろに引き上げる』

「交代は5時だ。あんたと会えるのはきつと6時か7時くらいになるだろうな」

『じゃあその時間に。おって連絡する』

「じゃあ一度、切るぞ」

立川との会話を一旦打ち切る形で携帯電話をポケットに仕舞うと装甲車の座席に深く腰を落とす。指に挟んでおいたタバコの灰はいつの間にか装甲車車内のマットの上に落ちていた。

「やってられねえよ…」

「すみませ〜ん」

コンコンと装甲車の扉をノックする音が聞こえた。窓越しでそのノックをした人物の顔を確認する。だが逆光で確認することが出来ない。仕方が無い。扉を開けて直接その顔を確認する。

「開けますからどいて」

「……」

ドアを開けて装甲車から出てノックした人物を確認しようとする。すると自分より何十センチも下にそのノックした人物は独特の威圧感を醸し出しながらたたずんでいた。銀髪に低い背丈…。

「フツ…」

そのノックした人物はそつと稲嶺の顔を見上げる。左目には黒色の眼帯…。これは…。

「引っ掛かったな…」

「君はこの生徒の…」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。お前に少し話がある」

「…、もうすぐ授業じゃないの？」

「フツ…、関係あるか」

途端に休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた――。

その後稲嶺はラウラに学園内の人気の無い所に無理矢理連れてゆかれた。（稲嶺の持ち場は別隊員に任せた。）拒否する事ももちろん出来たが彼女の威圧的な空気に負けた。

「ここだ」

彼女に連れて来られたそこは、非常に開けた場所で競技場のような作りをしていた。2人は観客席に立ち尽くしラウラは次第に観客席の下の方へ降りてゆく。

「お前達は、一体何が目的なのだ？」

「目的？」

風が吹いてラウラの小さな体軀に対してそのあまりに長い美しい銀髪が風になびく。

「お前達は本当に私達の監視だけが目的かと聞いている」

「ん…」

彼女のそのあまりにも核心を突いた質問にヘルメット越しに稲嶺は頭をかく。ヘルメット越しだから効果は全然無いのだが自然と落ち着く。

「どうなのか？」

「…どうなんだろうね。俺達にも分からない」

「達？」

「そうさ…。俺達はただ上からの通達でここにいるのさ。だから分からない」

「情けないなア…。日本の自衛隊は結束力では世界一と聞いたはずだが期待はずれか」

「所詮は人間って事だよ」

「なら私の軍が変わりに例の“爆撃犯”を退治してやってもいいのだぞ？」

「それだけは許さないよ」

ラウラの言葉に過敏に反応しその上今までに聞いた事の無いくらい気持ちの入った稲嶺の言葉が競技場内に響く。

「ほう。聞こうか？」

「俺達の任務は“国と国民を守る”事だ」

「私は、ドイツ人だが？」

「国に住んでいるその全ての人が“国民”なんだ。例えばそれが外人だろうがね。政治化が腐敗しても俺達の仕事は変わりはない。守るためなら手段は選ばない。それが俺の美学だ」

「……………」

「現場では俺達の声は届かない。でもそれを政治家達は“よくやった”と言う位だ。現場で泣き叫んでいる子ども達やその親達の声も聞かずに……。だからこの日本が戦場状態にならない様にするのが俺の……いやっ俺達の仕事なんだ」

しばらく稲嶺の話を黙って聞いていたラウラは黙っていたが、彼の話が終わると話し始める。

「ふーん……。まあ悪くない考えだな。まるであの人の様だ……」

「もう帰っていい？」

「ああ……。時間を取らせて悪かったな」

「分かってくれた？」

「フツ……。それじゃあ私も戻る」

ラウラは稲嶺と距離を縮めて横をゆっくりと通り過ぎる。銀髪がきれいに太陽に反射し稲嶺の耳元で彼女は囁いて去っていった。

「……………」

——だが私の嫁を守るのは私だけだ。それだけは覚えておけ。いいな？

09話 容疑者

その日の午後8時。

IS生産工場爆撃現場にて。

「遅かったじゃないか」

「中々抜けるのが大変だったんだよ？」

遅かったと言ったのは立川、抜けるのが大変と言ったのは稲嶺であった。昼間立川から“容疑者らしい人物が拳がった”と電話があり立川の指示でここに来させられ現在に至る。

「それで、容疑者が拳がったって？」

「私の車で話そうじゃないか」

車の車内で容疑者（らしい人物）を話してくれるそうだ。立川はすでに工場から出、すでに工場前の道路の上に立って稲嶺の事を待っていていた。タバコを啜えて火をつけて立川の後を追う。

「星がキレイだな……」

「そりゃ工場が操業停止をしているからな。人だって私達以外居ないから涼しいだろ？」

「言われてみれば確かにね。車はまだ？」

「そう慌てるな。もう着くさ」

「あつ、本当だ」

車内に乗り込むと立川は運転席側に座り稲嶺は前と同じく助手席に座り一応シートベルトを締める。ドアを閉めると車内灯のランプは徐々にトーンを下げて真っ暗になる。稲嶺の啜えているタバコは許可を貰って立川の車備え付けの灰皿に押し付ける。

「携帯灰皿はどうした？」

「持って来るの忘れた。アンタこそタバコはどうした？灰皿に一本

も入ってなかったぞ？」

「さつきスタンドで捨ててもらったんだ」

この時の2人の距離は50センチと満たない距離であったが街灯の明かりも無い真つ暗なこの人が全く居ないゴーストタウンで顔がよく見えるはずも無かった。かろうじて月明かりで顔の彫が分かる程度であった。

「本題に入るか？」

「ああ……」

「助手席の後ろのポケット」

「ん？？」

体を捻って助手席のポケットの上からはみ出している白い封筒を見つけてそれに手を伸ばして体の体勢を元に戻して手に持つ。だが暗すぎて見えない。それを察したのか立川は車内灯をつけてくれる。やっと封筒の口が見えそれを慎重に開けてクリップで挟まれている中身を全て取り出す。ざっと20枚くらいはある。その資料集の言語は全て英語で書かれていた。

「最初の5ページは調査報告……、残りはそれを和訳したものとその容疑者に関する個人データだ。その英文は電話で話したとおり、その元審判の証言をそのままメールで送ったものだ」

「立川さん、アンタ何者なんだ？」

「ただの調査員さ……。読んで貰おうか？」

「ふーッ……」

軽くため息をついて英語で書かれている最初の資料を飛ばして日本語で書かれている資料に目を通す。細かい文字で書かれているので少し読みづらい。しかも和訳された最初のページはどうやらISのメカニックに関する物のようだ。仕方無しにそこは飛ばし結果だけを求めて飛ばし続ける。すると案の定和訳ページを終えてその容疑者と思しき人物のプロフィールおほに行き着く。

「……レイル・フォッセン。モンドグロッソの元選手」

「千冬さんと戦った？」

「その通り第2回のモンドグロツソで織斑千冬と戦った選手で繰り上げて銀メダルを取った」

「その元審判がこのフォッセンのISだと証言したのか？」

「間違いないそうだ。このレイル・フォッセンの専用機は他の機種と違って特殊な形状をしているらしいからすぐに分かったそうだ……」

「報告するのか？」

黄色い車内灯が上からあたっている立川の横顔を見る。その顔は複雑そうな表情を浮かべて彼はタバコを啜えて火をつけようとするがそれを取り上げる。

「どうなんだ？」

「……明後日の会議でな。稲嶺さんは明後日も張り込みだろ？先生には私から連絡しておく。タバコを返してもらおうか」

「……ほらっ」

立川から取り上げたタバコをそつと彼の手の上に返すとすぐに火をつけ煙が車内を漂う。稲嶺は何を思ったのか車内灯を消して深いため息と共に助手席のリクライニングを倒して膝の上に資料を載せたまま寝転ぶ。

「複雑そうな顔をしているな」

「それはお互い様だろ。だって容疑者は千冬さんの元ライバル……
どうという顔をするか」

車内灯を消した立川の車内を照らすのは薄暗い月明かりと立川が吸っているタバコの赤い火だけであった。灰皿を引き出す音が聞こえタバコの火も消える。リクライニングを起こしてフロントガラスから見えるゴーストタウンを眺めるがやはり人など居ない。

「……」

立川が再び車内灯をつけて彼はハンドルを握り締めた。

「レイル・フォッセンの家族構成も見てもらおうか？」

「ん……」

レイル・フォッセン

家族構成：ロイド・フォッセン（弟）

「弟1人か？」

「書類上ではな。それは古いから更新されていないんだがレイルの弟は半年前に病気で死んだらしいんだ。彼女は弟を密葬し派手な葬式もしなかったとよ。封筒の中に硬い物が入っているだろ？」

「ん？USB??」

「レイルの住んでいる部屋に特別に入ったときの押収したホームヴイデオをUSBに落としたものだ。それも会議当日に見せるつもりだ」

「フーン…。なあ一つ聞きたいんだが」

「何だ？」

「何で立川さんは俺に優先的に見せてくれるんだ？」

「それは…」

稲嶺は自分の車でIS学園に戻るために県道を飛ばしていた。次の交代時間は午前6時で現在は午後11時。時間的には充分間に合うが着替えやら仮眠やらで飛ばす必要があった。

「なんで立川さんは俺に優先的に見せてくれるんだ？」

「それは…」

「稲嶺さんが男だからだよ」

「男だから…か」

現在
11時
17分。

10話 容疑者確定

翌々日。

IS学園内。

生徒の女子達の話の内容は毎日自衛隊の話であった。日を重ねるごとに一部を除く生徒達は不安にさらされその不安の矛先はそれぞれの担任にぶつけられていた。それを聞く度に担任たちは冷静になる様に指導していたがそれだけで落ち着くはずが無いのが高校生と言う生き物である。

「何時になったら撤退してくれるんだろうね…自衛隊の人たち」

「凄い物々しいよね…」

「そういえば、織斑先生は急にまた飛ぶ事になったんだって」

「嘘…、織斑先生が居てくれれば落ち着くのに…」

日々高まる緊張感と不安、そして生徒達の動揺。それはまるで風に乗るタンポポの種のように瞬く間に広がって行き余計に生徒達は不安に陥る。それを自衛隊員たちも自覚はしていたがどうにもならない。

校舎の見える場所ですつと監視をしている稲嶺の部下の武川武（女）（たけかわたけ）

も女子生徒たちに申し訳なさを感じながらあたりを見渡す。廊下には休み時間になると必ずと言うほど生徒達が身を乗り出して自衛隊員たちを逆に監視する。これがもう何日も続いており隊員たちの中には耐え切れず逃げ出した者も出ていた。逆にまともな精神状態を保っているのは隊長の稲嶺以外は彼の部下の武川くらいであった。

「ねえ、あの隊員の人。女の人じゃない？」

「あつ、本当だあ」

生徒達に自分が女である事が気付かれると武川は迷彩柄のヘルメットを深く被ってそっぽを向いて顔を隠す。

「……」

「あの隊員の人、結構かつこよくない？」

「確かに…、千冬様位に格好良いかもね…。昼休みでも声掛ける？」

「チャイムだ。戻ろっ」

武川の事を勝手に話していた女子生徒たちはチャイムの音を聞きつけてそれぞれの教室に戻ってゆく。それを見た武川は稲嶺を探してその場を去っていった。

「稲嶺隊長」

「おお、武川か。どうした？」

「私達ここに居ていいのでしょうか？」

「はい？」

毎度のごとく稲嶺の“はい？”の語尾はつり上がって返されてきてその返事を聞いた武川はヘルメット越しに頭を押さえる。

「隊長も、反対派だったんでしょ？」

「そりゃまあね…」

「私だつてなんで自分より年下の女の子…、男女を監禁しなきゃいけないんだつて」

「言い直した？」

「一応、男は居るので…」

「だよねえ…。確かにそれは言える。あつ1番目の方ね？」

「分かってます」

「武川、何歳だっけ？」

「23歳です。年も彼女達に近いのであの子達が動揺するのも良く分かるのですがね…」

「今何時？」

「もうすぐ12時です」

「そうか…、ありがとうよ」

もう会議が始まっている頃だよな…。

IS管理センター日本支部・特別対策室本部・第2回報告会議

「―以上が私が目星をつけた容疑者です」

「むっ…！」

室長のエミリアが深くソファに腰掛けたため息をつく。エミリアも千冬と同様にレイルと戦った経験があり仲が良かったからだ。千冬にいたっては弟のロイドとの付き合いもあった。（千冬とレイルの境遇が自分と似ていたから）

「千冬はどう思う？」

「それが事実なら仕方あるまい。例えそれが友人だろうが容疑者には変わりないんだ。それに立川さんが提示したこの証拠類は全てがレイルの犯行を物語らせている…。レイルが犯人である可能性は非常に高いだろうな…」

「じゃあ…それはつまり」

「ああ…。レイルを犯人として捕まえなければならない…。それだけだ」

千冬は冷たくレイルの事を犯罪者扱いしたが内心ではレイルと久々にあった日の事を思い出していた。

「……」

「ハアハアハア…、ハア」。中々声掛けられなくて困ってたんだよ。千冬。

「お前は相変わらずだな。レイル・フォッセン。」

「もう一つ。これは彼女の部屋から押収したホームビデオをUS

Bに落とした物ですが…、ご覧になりますか？」

「いいえ。ありがとう。ここまで調べてくれて」

「ではこれは」

「私が頂くわ。立川さん」

千冬が突然立ち上がって立川のそのホームビデオのコピーを入れているUSBが欲しいと彼に懇願する。すると立川は意外にあつさり千冬にそのUSBを渡して自分のイスに座った。

「それじゃ、今回の容疑者はレイル・フォッセンで異議は無い？異議が無い場合は沈黙で」

「……………」

「異議なしの様な…。それじゃあ解散！」

「また今度試合でもどう？結構強くなったつもりなんだけどなあ。」

「……、悪い。私はもう引退してるんだ。」

「レイル…私はお前を…」

捕まえないければならない…。

10話 容疑者確定（後書き）

おまけ

その頃のIS学園

「武川さんって何か好きなものはありますか？」

「嫌いなのは特に無いけど…」

「それじゃあ、今度私が！」

「いいえ、武様には私が…！」

「お前も大変だね。武川」

「放って置いてください。殴りますよ？」

「怖っ。怖いよ武川」

「だから、放って置いてください」

「ああいう勝気なところも素敵…♪」

「千冬様と同じくらいカッコいい…♪」

11話 ホームビデオ

立川から貰ったレイル・フォッセンの自宅から押収したホームビデオを収録したUSBを千冬は観るか否かで数時間が迷っていた。内心では昔のライバルであり家族ぐるみで付き合っていたレイルが犯人である事は信じたくなかったのだ。そしてこのUSBには犯人でない私生活のレイルが映っている…。

そして、レイルの弟、ロイドが死んでいることなんか千冬も全く知らなかった。久しぶりに会った時も一回も彼女はそれに関して触れなかったのはそれが原因だろう。

「……」

思い切って観る事を決意した。自分のノートパソコンにそのUSBを差込みパソコンの液晶に表示された“ビデオ再生”をクリックする。

しばらくお待ちください…。

30秒ほどしてからビデオが再生される。ビデオの内容はエレベーターに乗っているシーンから始まっていた。赤く着色されている鉄骨の間をエレベーターは一定速度で登って行く。ビデオを持っているのは察するに弟のロイドだと思う。顔は直接映っていないがビデオを撮っている人物と腕を組んでいるのはレイルであった為、消去法でビデオを撮影しているのはセシリアと確信する。

『皆様、お待たせしました。第一展望台でございます』

エレベーターの放送は日本語であった。つまりここは東京タワー辺り

だろうか？次々と同じエレベーターに乗っていた人たちが降りて行きビデオの主とレイルもエレベーターから降りるのが確認できた。

『姉さん。展望凄いきれいだよ』

『あう……、怖いよ』

腕を組んでいる人物が“姉さん”は何かを怖がっている。腕を組んだままレイルはロイドの腕から離れようとしな。ビデオを撮っているロイドの声は呆れ気味だ。

『それでよくISの選手だね』

『だって、あの時は戦いに集中できるけど普通のときは怖いんだよ』

『どういう恐怖症だよ？』

『あう……』

何気ない幸せそうな会話。高いところを怖がっている姉を優しく慰めているしつかり者の弟。どこを見ても仲の良い姉弟にしか見えなかった。

「……………」

だが、千冬はそのビデオを観てどこかモヤモヤを感じたのだがこの時はそのモヤモヤの正体が分からなかった。その後5回ほど見直したがモヤモヤが晴れる事はなかった。

もはやその光景は当たり前の光景になりつつあった。毎朝自衛隊隊員が学園の敷地内で見張りをし生徒達はその光景になれて隊員たちの存在はいつしかその学園の風景になっていた。毎日生徒達は当たり前のように学校に通い、隊員たちは毎日同じ事を繰り返し何事も無い事に安堵を浮かべる。

夏の朝陽はすぐに南中し夏らしい暑い気温まで上がる。

朝昼問わず暑いところでただ立っているだけと言うのも身体的のも精神的にも疲れる。俺の様な汗を毎日かいてはシャワーで流し寝てはまたその繰り返し。隊長の稲嶺もそろそろ疲れが顔に出ている。

「暑いねえ…武川」

「ですよ。一体なんでこんな事をしているのか…」

毎回授業が終わるおきにチャイムが鳴り生徒達は廊下に出たり食事をしたりし休み時間が終わるチャイムで生徒達は元の教室に戻る。だが監視をしている隊員たちに休み時間という羨ましい制度は存在しない。毎日が監視という名の授業だ。そして自衛隊員たちは思い知らされる。

何故自分達は高校生を監禁同然の監視をしなければならないのか？と。

次第にその不安は募るが生徒達に心配をかけまいと隊員たちはその行き場の無いイラつきを誰にぶつける事も無く1人で抱え込む。実に酷いサイクルだ。こんな生活がいつまで続くのか考えるだけでゾツとする。稲嶺は職務中にも関わらずタバコを吸うが誰もそれを注意しない。真面目な武川もだ。

「…上に文句をたたきつけないか？武川」

「フツ…、確かにそれは良い案ですね。直接抗議でも？」

「そうだな」

吸っていたタバコを投げ捨てて装甲車に持たれかかりタバコの煙混じりの息を吐く。

「今夜にでも行くか？」

「えっ??」

12話 稲嶺の停職処分

防衛庁。第1会議室。

幕僚長や幹部達、そしてそのOB一同は第6部隊隊長である稲嶺隆一とその部下、武川武による報告を聞き入れる為この会議室に集まっていた。まず現・幕僚長の伊藤からの挨拶が行われ報告の会が始まった。

「今回、幹部やそのOBの皆さんにお集まりいただいたのは他でもありません。以前発生したIS生産工場襲撃事件とそれに関連したIS学園生徒保護の目的で行った陸上自衛官の派遣。今回はそれらの報告を陸上自衛隊第6部隊隊長の稲嶺隊長と武川隊員に説明をしてもらう所存であります。ではまず武川隊員から報告を受けたいと思います」

指名を受けた武川は座っていたイスから立ち上がり報告をするのか思いきやまずとんでもない発言から会議をスタートさせた。

「その前に、我々がなぜこの様な事をしなければいけなかったのかそれを伺いたい」

それに応える形で喋ったのが幹部OBの太田であった。13年前に退職した太田には独特の貫禄が漂って見える。太い声と貫禄の入った顔で実に落ち着いていた。

「言う必要もあるまい。我々の目的は“国家の防衛”。子ども達を守るのは当然の責務だろう。それが分からんのか」

「では聞きますが、国家の安全を謳うのであればなぜ一介のIS学園に通う10代の子どもを監禁同然の監視をしいたのかをお聞かせ頂きたい」

武川の強気な姿勢を間近で座りながら見ていた稲嶺は何も喋らず足を組んで貧乏ゆすりをして気を紛らわせる。後ろに張ってある世界地図を一瞬見て前を向きなおし幹部の声を待つ。

「監禁とは言われたものだ。ISの襲撃に対処するための法規的な措置だと考えられんのかあその生徒達はISを動かせる若者だ。仮にIS襲撃犯の目的が彼女達としたら」

「私達が言いたいのは、上層部のそのあまりにもずさんな対応です。私達は日本と言う国を守るために自衛官になったのです。一部じゃない、全ての国民を守るのが自衛官です。ISを動かせるといっても彼女達はまだ20歳にもなっていない未成年です。そんな生徒達に無用な混乱と動揺を与え、その上ここまで事態を放置した責任を誰がどう取るのですか。現場の声を無視し続けてきた行政は一体何の為、誰の為にあるのですか」

「武川隊員。君は自衛官としての自分を自覚しているのかね？私達は現場の声を聞き入れ努力してきたつもりだ」

「いやっ、そうしてきた。それを変な文句を並びたてられたらこちらも返答に困る」

「……………」

武川が黙り込んでしまった。返答に困るといわれ困っているのは武川の方であった。文句なら数え切れないほどある。しかし、どれから文句を並べたらいいのか彼女には分からなかったのだ。

「どうだ？武川隊員」

「……………」

「稲嶺君。君はどう思つかね？」

幕僚長の伊藤に指名をされて稲嶺は座ったままブツブツを誰にも聞こえないような声で独り言を言い、その隣で武川は座り込む。

「…現場で動いていた我々は数々の死体を見ました。さっきまで生きていた小さい子どもが銃撃で死に」

「何の話しかね？」

「現場で我々は何もする事が出来なかった。“発砲の許可を乞う”と連絡しても返ってくるのは“許可できない”。それは何故か、憲法第9条の縛りがあるからだ。すぐそこで死に掛けている子どもすら助けられなくて何が憲法か…」

「憲法に従って我々は行動するのだ。救えなかった命は救えなかった。それだけだ」

幹部OBのともない発言に稲嶺は、パツと眼を開けて両拳を握り締めた。隣で座っていた武川も歯を食いしばる。

“ 救えなかった命は救えなかった。それだけだ ”

「あなた方それでも国家を守る自衛官か！」

「！???」

そう言い出したのは武川の方であつた。机を思い切り掌で叩き立ち上がって会議室に聞こえる位大声で叫んだ。部下の武川の声を聞き武川の顔を稲嶺は見上げる。彼女の顔は真剣そのものだった。

「どういう意味だそれは？その暴言は場合によつては厳罰に処する事になるぞ」

「救えるはずだった命が目の前で消える。その苦しみをあなた方は体験したはずだ。何度も何度も…。そして拳句の果ては仲間まで失った経験を私達は何回もした。１メートルにも満たない距離で子どもや仲間が死んでいったんです。それを“それだけ”で済まされるのなら日本の憲法はどれだけ腐敗しているのか伺いたい！」

「武川君。君のその暴言はもはや我々に対する侮辱としか思えん。

君を停職１ヶ月にする」

「稲嶺君。部下の失態を君はどう責任を取るつもりだ？」

伊藤に責任問題を問われ稲嶺は机に視線を落として俯き加減になり静かに話し始める。

「…幹部の皆さん。私達は戦場というリアルなものを見て来ました。だがその戦場を日本人は忘れのうのと生きている。自らその戦争に生かされているとも知らずに。そして戦争は“IS”と言う物で日本にも飛び火する…。いやもう既に飛び火している」

「何を訳の分からん事を…。戦争の無い国。それが日本」

そつと俯き加減だった稲嶺の顔が上がりテーブルに座っている伊藤や幹部達を嘲笑した表情を浮かべて見渡す。

「日本の戦争は…、見えない所でとつくの昔から始まっているんですよ。その戦争を表に出したのが今回の襲撃事件だ…。幕僚長！あなたにはもうあきれ果てました。自分も武川隊員とともに処罰を受けたいと思います」

「稲嶺君。君は利口な男だと思っていたが…、君も停職処分にするが時期が時期であるし停職2週間に処する」

「2人とも連れてゆけ。顔を見るだけで不機嫌だ」

伊藤幕僚長の言葉で稲嶺と武川の2人は会議室を放り出された。

防衛庁の駐車場で稲嶺の青い車に稲嶺と武川が乗り込んで助手席に座った武川は不機嫌そうな顔をして稲嶺もどこか満足していない顔をしている。

「これからどうします？稲嶺隊長」

「…なあ武川。お前もこれで暇になつたろ？」

「えっ??」

「お前も…、例の調査に参加してみるか？」

車のエンジンが掛かり稲嶺は防衛庁の駐車場を後にした。助手席に座っている武川は考え込んでいる。

「そう深く考えるな」

「……………」

「お前は頭がいいんだ。きっと役に立つさ」

「…分かりました。でも役に立つかは別ですよ？」

「決まりだな」

12話 稲嶺の停職処分（後書き）

今回はIS全く関係ありませんでした。ごめんなさい。

13話 容疑者搜索開始（前書き）

容疑者の弟の名前、最初はセシリアでしたがオルコットと被るためロイドに変更しました。

また話の都合上ちょっとだけラブコメを挟んでみました。（挟む必要がありました）

13話 容疑者搜索開始

IS 特別対策室のメンバーに新しく稲嶺の部下の武川が加わっていた。女性と言うこともあつてすぐに対策室の面々と打ち解けることが出来て上司である稲嶺も内心はホッとしている。軽く武川の紹介が終わった所で対策室の会議が始まった。会議は立川中心で進められその内容は容疑者のレイル・フォッセンの搜索チームの編成に関するものであった。

「先生達はレイルと面識がおりですよね？」

「ええ」

「では、私と一緒に彼女の行ったルートを探るということで異議はありませんか？」

「ないわ」

「ありません」

立川と千冬たちはレイルが行ったと思われるルートを探る事で決定し残る稲嶺と武川の方をどうするかで会議はそちらの方に傾いた。

「稲嶺さん。アンタはどうする？」

「…残念ながら俺と武川は動きづらい。幕僚長たちにケンカ売っちゃったからなア」

「じゃあ影でコソコソ動くしかないってか？」

「多分ね…。そのレイル・フォッセンの弟を亡くしてからの半年間、向こうでの動きが掴めればなあ…あつそのレイルの国は？」

「オ」

「オランダですが」

立川が“オランダ”と言い掛けた途中で稲嶺の向かいに座っていた千冬の声で邪魔をされた。皆が千冬の方に視線を向けるが彼女は冷静で資料を読んでいる。

「フーン、オランダか…。確かあそこはドイツの隣国だったよな…」
「稲嶺さん？」

千冬が頭上に疑問符を浮かべて稲嶺の名を呼ぶ。すると彼は“なんでもないよ”と答えて軽く流す。その会話が終わると立川がにやりと笑って、

「早速始めますか。稲嶺さんと武川さんはフォッセンの向こうの動きを出来るだけでいいので集めて頂いてよろしいでしょうか？」

「ええ……まあ。武川もそれで良いよな？」

「はい。異議はありません。しかしその情報収集はどこで？」

「ここで良いんじゃないの？ ねえ立川さん」

「……良いでしょう。では搜索に出かけましょうか」

「そいじゃあ！ 解散！」

室長のエミリアの掛け声で全員が離散しエミリアと立川達は先に会議室を出て行き千冬も立川たちの後を付いて行こうとドアの取っ手を握ったが稲嶺の方に顔を向けてドアから離れて彼と武川の元に近付く。

「稲嶺さん」

「何？」

「……私達に内緒で動くのは無しですよ」

「それはちよつと難しいかなあ……」

「そうですね……。それでは私も行きますので」

その時の稲嶺の顔を見つめる千冬の顔は彼女にしては珍しく複雑そうな顔であった。それこそ今にも泣き出しそうな儂げな顔であった。その顔を浮かべたまま千冬は稲嶺に背を向けるとそのままドアの取っ手を握って会議室を出て行く。そこに取り残された稲嶺と武川は少しだけ沈黙を味わい武川が沈黙を破る。

「隊長。何企んでいるんですか？」

「バレた？」

「隊長ですからね。どうするつもりなんですか？ オランダまで飛べませんよ？」

「……なあ武川。お前に頼みたいことがあるんだが」

「はい？」

会議室内で武川に頼み事をする^と稲嶺は「タバコと電話をする」と言^{つて}て会議室を出、緑色に塗^られた鉄製の非常扉を開^{けて}てその向^こうにある非常階段の階段に座^り込んで携^帯電話を取り出^す。

時間は12時45分。

時間的には丁度いいだろう。電話番号を書^{いて}いるメモを携^帯電話を仕舞^{つて}いた同じポケットから取り出^{して}てそこに書^かれている電話番号に電話する。

『はいっ』

「もしもし〜？私^{わたし}稲嶺と言^う者^はですが…」

同時刻・IS学園・1年1組

最早^{もはや}このクラスではいつもの光景にな^{つて}いた。織斑^{おりむらいちか}千冬の実弟である織村一夏^{ありむらいちか}（世界で唯一ISを動かせる事の出来る男子）の女子達による取り合^い…もとい奪^い合^い。

「一夏、一緒に昼でも食^べないか？」

「一夏さん！今日^{わたくし}は私^{わたし}と」

「僕も一緒にい」

「一夏あ！」

「おっ、みんなと飯か。久しぶりだな」

「唐変木！」

「なっ何だよ！」

一番目に一夏に声を掛^けけたのは一夏の幼馴染の篠^{しの}ノ之^の箒^{はうし}。2番目がイギリス代表候補生のセシリア・オルコット、3番目の僕^がっこがフ

ランスの代表候補生であるシャルロット・デュノア、4番目は、ファンリンイン国の凰鈴音。そして彼に対して「唐変木！」と叫んだのはその4人。当の本人はなぜそう言われたのか理由が分からない。そう言う所が「唐変木」と言うのに。

「おいっ。私の嫁に近付くな」

一夏を「自分の嫁！」と言ったのはドイツの代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒである。（一夏のファーストキスを奪った。）すると途端に背の低い彼女に避難轟々。

「ラウラさんっ！」↑セシリア

「後から来たお前が言うな！」↑箒

「そうよ！私は一夏と長い付き合いなのよ！」↑鈴

「僕は…、何もない…」↑シャルロット

最後のシャルロットにいたってはかわいそうにしか思えない発言であつたが、一応それぞれ彼に対して興味を示しているのは誰から見てもわかる光景だがこれを分かつて貰えないから彼女たちの気苦労は絶えない。その4人の主張を全て聞きつくすとラウラは微妙な笑顔をを見せて―。

「ほう…。ではお前達はコイツと…」

と、ラウラは一夏と口と口とを引っ付けて…、いわゆるキス。しかもラウラの場合二度目と来ている。

「これをした事があるか？」

「あっ―！」

口づけをやめると彼女は4人に対して自慢げな表情を浮かべる。

「分かつたろ？」

「ナッ！」

4人が呆気にと取られていると学園中に放送が鳴り響く。

『1年1組のラウラ・ボーデヴィツヒさん。電話を預かっております。職員室までお越しく下さい』

「……………」

その放送を聞いてラウラやクラスメイト達は黙りこくって彼女は面

倒くさそうな表情を浮かべると、黙って教室を出て行く。しばらくは沈黙が教室を襲ったのだが。

「昼飯…。食いに行く?」

一夏の一言によって、皆がいつも通りの行動を再開する――。

14話 見えない犯人

放送で職員室に呼び出されたラウラは、廊下を歩き職員室に到着すると黙って中に入り電話の受話器を握っている山田の元に近付いて彼女から受話器を受け取り（奪い取り）保留音が流れている電話に出る。山田が保留を解除してやっと相手との会話が始まる。

「誰だ？」

『もしもし、稲嶺です』

「何だ…。お前か。折角人が良い夢を見ていたときに邪魔をして」

『ゴメン…』

「ふっ、まあそれに関してはお前に聞かせてもらった理論に免じて許してやるうじゃないか」

『良かった』

ラウラの上から目線発言でも相手の稲嶺はいつもの一本調子であった。その碎けた喋り方をする相手と話しているラウラは山田の机に軽々と座って電話を続ける。

「ところで、わざわざ学校に電話して私を呼びつけたと言う事は…」

『うん。物凄く大切な頼み事を頼みたいんだけど…』

それを聞くとすぐに辺りをキョロキョロ見回して、

「それは、職員室で話せる内容か？ここの電話は事務所とかでよく置いてある固定電話だぞ？」

『それは…、ちよつと困るなあ…』

事務所とかでよく置いてある固定電話。それはつまり盗み聞きをしようとするば出来てしまうと言う事だ。電話の向こうで稲嶺は困ったそうな声を出している。するとラウラから予想だにしない提案が出てきた。

「…今から私の携帯電話の番号を言うから、放課後にでもまた掛け直して来い」

『いいの？』

「あくまで、お前の理論に免じてだ。私はお前の前に話してくれたあの考え方が好きな方だ」

『そりゃどうも』

「と言う訳だ。今から言うから聞き漏らすなよ？」

『メモする』

電話を切るとラウラはさつと山田の机から降りて職員室から出て行く。その威圧的な雰囲気放つ彼女の存在は職員室中でも異彩を放ち彼女が出て行って暫くはしんと静まり返っていた。

職員室を出て廊下を歩いて食堂に向かうラウラの顔はどこか複雑そうな顔つきであった。

「さてどうしたものか…」

ラウラに電話を切られると非常階段の階段から腰を上げてポケットに携帯電話とラウラの電話番号を書いたメモを突っ込んで武川が待っている会議室に戻る。

「ただいま」

「お帰りなさい…。隊長。ヤケに長いタバコと電話でしたねえ？」

いきなり武川の意味深な質問の仕方にすこし戸惑うがそこは稲嶺。適当に誤魔化して流そうとする。

「相手が中々出なくて」

「ふーん…。ところで隊長」

「なっなんだ？」

「この部屋に灰皿あるのに何でわざわざ外へ？」

「うそつ。ここの建物って全部禁煙じゃ…あつ」

「嘘です。見事にかかってくれましたねえ？稲嶺隊長？」

武川が仕掛けた鎌にまんまと、かかってしまった。それに今は武川

以外言い訳をしてくれる様な人物が全然居ない気まずい状況ときている。

「白状……。してくれませうよね？それさつき織斑先生が言っていましたよね？“私達に内緒で動くのは無し”って」

「は……」

仕方無しに武川に全てを話した。洗いざらい全て話してその話を聞いた武川の方は「何やってんですか！」と、言いたそうな顔をしている。

「そういう顔を浮かべるなよ」

「浮かべない方がおかしいですよ！何で高校生を巻き込むんですか！しかもよりにもよってIS学園の生徒に！」

「いやあ、その子も軍人だったって言うし……ね？」

「ね？じゃないですよ！軍人だとしても子どもを巻き込んだら本末転倒じゃないですか！」

「怒るなって」

「何の為に私達停職になっているんですか！？」 ↑ 正論

レイル・フォッセンの搜索チームの方が最初に向かったのは国際線が飛んでいる空港であった。入国管理局に確認をする為にここ1ヶ月以内に入国した外国人の名簿を提示して貰いそれに書かれている名前を1人何部かで分かれてみっちり確認する。

しかし、その名簿にそれらしい名前は確認する事が出来なかった。（ここから偽名を使っている可能性がある）その後、他の空港にも赴いたがそこにもそれらしい名前はどこにも無かった。

それこそ、レイル・フォッセンと言う人物そのものが最初から日本と言う国に来ていなかったかのように……。どこに居るか分からない透明人間を追っている様であった。時刻は3時頃になっており、立

川の車で一旦帰る事になった。運転席に立川、助手席にエミリア、後ろに千冬が座って車が出発した。

「暑う…。ふう…。無かったねえ…。名前」

「そうですね…。これは予想以上に大変そうだ」

「……………立川さん」

「はいっ？」

「すみません。一人で寄りたい所があるのですが」

「構いませんよ？」

「ここで降ろして下さい。後は自分で行くので」

14話 見えない犯人（後書き）

武川の突っ込みがなんか好きな作者です。

武川だったら怒りたいですねw

15話 あの日、あの時

千冬は立川の車から下車するとそこから人通りの多い歩道を暫く歩き続けて信号などに邪魔され、更に歩く事、約20分。ようやく着いた場所は以前あのISに関する講義が開かれ、レイルと再会を果たしたあの高層ビルであった。高いビルの壁に面して展望エレベーターが上下しその内の一機がレイルと短いながら会話をしたエレベーターであった。視線を落としてビルの自動扉に対して距離を縮める。自動扉が両方に関き、エアコンがよく効いた高い天井の1階が千冬の目に入る。

「何かご入用でしょうか？」

千冬に突然声を掛けてきたのはこのビルのスタッフの女性であった。スタッツらしいスーツを着こなして名札には「後藤田^{ごとうだ}」と書いてある。その後藤田は屈託の無い笑みで接客をしている。

聞かれたからには答えなければならない。

「織斑千冬と申します。先日行われたIS講義に講師として参加したのですが…。その講義の参加者名簿を見せて貰うのは…」

「織斑様ですね。今上の者と確認をして参りますので…応接室へどうぞ」

と、全然濁りの無い後藤田の笑顔に圧倒され、彼女に案内されて千冬は応接室のソファに座らされて、

コーヒーを出されてそのまま後藤田が帰ってくるのを待つことにした。千冬以外いない応接室。時計の秒針だけが応接室内の音源になっていた。5分ほど経ってから応接室の扉が開く。後藤田が先入室し、

後ろから資料のような物を脇の下の挟んでいる男性が入ってくる。資料を持った男性が応接室のテーブルにそれを置くと千冬の真向か

いのソファに座り、後藤田はその隣に座って軽く挨拶をする。

「資料の管理主任をしております。時田ときたです。参加者名簿を見たいと…」

「そうです。参加者名簿で確認したいことがありまして」

千冬がその時田の質問に即答して一瞬その即答ぶりに後藤田と目を合わせたが気を取り直してテーブル上に置いてある資料に指をさして説明を始める。

「こちらがその講義の参加者名簿ですが、150人近くが参加していますよ?」

「当日は、予約での参加でしたか?」

「いいえ。講義は予約不要。要するに自由参加ですね。その代わりに参加者名簿と住所あるいは宿泊先を付けさせて頂く形を取らせていただきましたが」

「それが、その名簿ですか?」

「ええ。講義をなさる先生方などを除いては全てです。名簿を書いてもらったと我々が五十音順に編集したのがそちらになります。外国人の方は、カタカナ表記にしましたが」

「そうですか…。ここで確認してもよろしいですか?」

「構いませんが、個人情報が含まれているので他言無用ですよ」

「分かっています。ラ行だけを見せてもらったら結構ですので」

「ラ行ですね…。あつこれだ」

時田がラ行の名簿を探り当ててそれを千冬に手渡す。手渡されたその名簿を開いてラ行の中の「レ」を開いてレイル・フォッセンの名前を探す。

「レ…あつた」

そこにはハッキリと「レイル・フォッセン」と書かれていた。空港の入国管理局の名簿に残されていなかった彼女の名前がそこに書かれていた。名前の横に書かれている宿泊先は逢坂第一おつさかだいいちホテル。名前からするにビジネスホテルの様だ。

「ありがとうございます。もう結構です」

「もうよろしいのですか？」

「はい。お手数をおかけして。ありがとうございました」

「はあ…。何かお役に立てたのなら…。後藤田。お客さんをご案内して」

「はい。どうぞ」

「失礼しました」

応接室を後にして後藤田に案内され、千冬は再びあの1階に戻る。戻ったところで後藤田はその場を立ち去り千冬1人だけが残される。

「……………」

千冬は黙って自動扉とは逆方向に向かって歩き始めた。そこにあつたのはあのエレベーターの扉であつた。「↑」のボタンを押してエレベーターが到着するまで扉の前で待つ。鉄製の扉が開くと数人がエレベーターから飛び出して代わりに千冬が1人でエレベーターに乗り込む。扉が閉まると、エレベーターの箱が上に上がり始めてパノラマが開く。あの時レイルが覗いていたパノラマを見渡す。

「……………」

IS学園の授業が終わってラウラは領内の自室に戻り自分のベッドに寝転ぶ。同室のシャルロットは戻ってきていない。寝転がって暫くして携帯電話が鳴り響く。着信相手は“自衛官”と名前ではないものが表示されておりそれに出る。

『私だ』

「どう？授業終わった？」

『まあな。ちゃんと連絡してきたか』

「約束ですしね」

『フツ……。お前は本当に自衛官かと疑いたくなるな』

「どういう意味？」

「なんでもないさ。それで頼みたいとは何をだ？ “脱げ” と無理なものは無理だぞ」

出来れば冗談だと信じたい。いやっこれはきつと皮肉の聞いた「冗談」なのだろう（多分）

『……その、君はドイツの軍人とか言っていたよね？』

「まあそういう時もあったな。それがどうした？」

『君の力が必要なんだ。君は下に誰かいるか？』

「何人かはいるが？」

『レイル・フォッセンと言うオランダ選手の現地での私生活を調べて欲しいんだ』

「レイ……。ああ……。あの選手か」

『そうだ。オランダはドイツの隣国だろ？それを調べて欲しいんだ』

……

「容易い事ではあるが……。一つ聞きたいことがある」
『なに？』

「何故私をこつも頼る？」

『うーん……』

「どうなんだ？答えによつちや協力できんぞ？」

『……外人に友達いないから』

「……」

『ダメ？』

「一応合格と言うことにしよう……。じゃあな」

電話を一方的に切りそして携帯電話を床に落として布団の上をゴロ

ゴロ動く。

「友達…か」

15話 あの日、あの時（後書き）

「
↑これは視点切り替えとお思い下さいませ。」

16話 ラウラの協力と武川の憂鬱

ベッドで暫くゴロゴロ寝転がってからラウラは寮の部屋から退室し誰もいないような場所を探す。内容が内容だけに誰にも聞かれなくなかったのだ。結果的に彼女がたどり着いたのは、以前稲嶺と2人きりで話し合った場所であった。適当の観客席のイスに座って携帯電話を取り出して相手の応答を待つ。

「クラリッサ、私だが。」

「隊長。どういたしました？また織斑^{かれ}一夏の事でしょうか？いいでしょういいでしょう……。まずは――。」

「確かに相談したいのは山々だが今回は別件だ。」

「……。」

黙り込むクラリッサの後ろから「副隊長、残念そうだわ」とか「隊長にしては珍しい」など時折失礼な言葉が飛び交った気もするのだがその辺りは無視する事にした。

「話をしてもいいか？」

「はっはい。」

「実は、ある自衛官からの頼まれ事なのだが、レイル・フォッセンと言うオランダのIS操縦者のここ半年の現地での生活を調べてほしいのだが。」

「自衛官……ですか？」

「そうだ。本当なら私が調べたいのだが、知つての通り私はあいにく学業がある。だからそちらの協力を乞いたい。」

「分かりました。我々は隊長と共にいます。明日にでも数名派遣しましょう。」

「悪いな。」

「ところで隊長。一つ聞きたいことが。」

「なんだ？」

「隊長とその…、自衛官とはどういう関係ですか？」

むぐつとちよつとだけ電話越しで唸っていると閃いたとばかりに「そうだ」と小さい声を上げて電話の向こうで待たせているクラリッサに答える。

「友人だ。かなりの年の差だな。」

「……。まっいいでしょう。」

「意味深だな。」

「それはお互い様でしょう。」

「では、何か小さい事でも分かったら悪いが連絡をくれ。」

それで、クラリッサとの会話を打ち切り携帯電話をポケットに仕舞って観客席から立ち上がって自分の寮のある方向に体の正面を向ける。途端に強い風が吹き上げる。その風は競技場のグラウンドの砂埃を上げて、その砂埃が真っ赤な夕日の光を際立たせる。

「……………」

暫く使われていなかった競技場は、実に静かであった。顔だけ振り返って一夏と戦ったあの日を思い出す。あの時の、あの熱気がもうこの競技場には感じられなかった。

「帰ろう……」

「ただいま、武う」

「お帰りなさい。テルビンさん」

ノートパソコンをいじっていた武川はエミリアに対して生返事だけ

を返して再びノートパソコンの液晶に目線を落とす。すると、エミリアが武川の肩を揺らしてわがままをこね始める。

「ああんっ。パソコンいじりながら答えないで目を見て答えてよ。お願いだよ。武。後、テルビンさんじゃ無くてエミリアで呼んでよ。」

「止めてください」

横から稲嶺が冗談交じりに武川に不敵な笑みを浮かべながら話しかける。

「学校だけじゃなくてここでも人気者だねえ。武川」

「いい加減にしてください。隊長、テルビ」

“テルビンさん”と武川が言いかけた所でエミリアが武川に上目遣いで両手を握っていかにも“名前で呼んでオーラ”を全開にしていた。

「エッ…、エミリアさん…。私には仕事が…」

「やった！武が呼んでくれた！」

武川とエミリアが勝手に2人の世界で盛り上がっていると稲嶺が外に出た調査チームの1人が居ない事に気付く。

「あれ？千冬さんは？」

すると、武川の背中に押し掛かっているエミリアが答える。ちなみに武川の方はエミリアで潰されかかっている（腰あたりが）。

「ああ…、千冬ならどっかに行っただけど？」

「どっかつて？」

「さあ????？」

千冬の行き先を立川にも尋ねたが「知らない」と返されて他のメンバーにも一応聞いたが誰も知らないという。

「どこ行っちゃったのかなあ？」

17話 レイルの生家（前書き）

今回は台詞ばかりですw

17話 レイルの生家

数日後。

稲嶺の自宅。

連日報道されていたIS襲撃事件のニュースの色は徐々に薄れて行き、その代わりに次から次へと流れ込む新しい世界情勢がテレビを飾ってゆく。蛍光灯の冷たいような青白い光が部屋を照らす。

テーブルの上で置かれているコンビニ弁当のごみとペットボトルのお茶、タバコが押し当てられた灰皿、そして携帯電話。

窓の外から見えるいつも夜の街並みたち。

ビルの屋上で点滅する赤い電灯。

窓の外を覗いているとテーブルにいていた携帯電話がブルブル震え出して自己主張を始める。すぐに手にとって着信相手を確認する。

“ドイツさん”

「はいっ、こちら稲嶺」

『私だ。お前に頼まれていた事とりあえず報告しておこうと思っ
な』

「おうっ、ボーデヴィツヒさんではないか。いやぁ助かるよ。それ
で」

『私の忠実な部下達が、例のレイル・フォッセンの生家を調べてきたんだ』

「ありがとう。それで結果はどうだったの？」

『…』

「どうしたの？」

『どうしたの？』

「それがどうもおかしな所が幾つかあるらしいんだ」

『それはどういった？』

「レイル・フォッセンは、近所の話だと趣味だったガーデニングの花を1ヶ月と足らずに全て枯らしてしまっただけなんだ。この意味が分かるか？」

『いくら弟の死がショックだからといって趣味にずばらをかますのはおかしいって？』

「よく分かっているな。趣味を丸投げする人間はざらだが、花を1ヶ月足らずで枯らすのは不自然だろ？」

『まあ、確かにね。現地で近所の人には』

「聞いたそうさ。そしたら―」

「2ヶ月以上見なかった？」

「ああ、弟さん死んでショック受けたんだろうかね？2ヶ月は家に籠っていたよ。電気も全然つけていなかったみたいだし…後、ゴミ捨て場に綺麗な服が捨てられていたよ」

『女物？』

「そうだったらしい。ますますおかしいだろ？年頃の教官と同年ぐらいの女性だ。簡単に鮮やかで綺麗な服を手放すと思うか？」

『俺、中年のおっさんだからよく分からんけど多分ないだろうね』

「ああ、滅多な事が無い限りな」

『それで』

「ああ、つい2週間前にヤツはオランダを出ている。近所の人間が海外に旅行に出るという話を聞いたらしい」

『それならね、千冬さんが先日行われたISの講義会場でフォッセンと話したと言ってね。色々空港調べたけど、その名前は見つからなかったって』

「…、これはあくまで私の考えなんだが」
『なにっ？』

「名前のすり替えは考えられないか？」

18話 対立

最初のあのIS生産工場空爆事件から早3週間が経ったが相変わらずレイルの身元は分からずにいた。世界の目も今回の事件には強く興味を示しており各国のIS生産会社も生産を必要最小限に控えて稼動しているのがほとんどであった。中にはシャルロットが生まれたフランスのデュノア社も含まれていた。世界が一つの小さな島国・日本の事件がきっかけで緊張の意図が張り巡らせる異様な状態になっていた。

一方、当事者の日本の夏の蒸し暑さはより一層増すばかりであった。

IS会議もいつしか毎日のように開かれる様になり稲嶺は謹慎処分が解けたまたIS学園の配備にまわされる様になった。相変わらず学園での生徒と陸上自衛官達との溝は深かった。

第17回公式会議

誰もいない会議室で稲嶺が携帯電話で誰かと話をしていた。

「うんうん。ありがとね。後でちゃんと酒でも奢るから…えっ？酒飲めない？」

『はいっ…』

「まあある程度調べて貰ったらでいいから。うんっ。じゃあ」
電話を切った途端に今回の調査本部のトップのエミリアが入ってきて稲嶺と挨拶を交わすと会議室をキョロキョロ見渡す。

「あれっ？武は？」

「ああ。武川ならちよっと調べて欲しい事があるからちよっと出張中ですよ」

「ふん…。千冬や立川は？」

「さ」

「―おはよう」

さあと言いかけた所で千冬とデヴィスが会議室に入室してくる。後ろから立川も続いて入室して来た。

「コレで全員かな？どう？稲嶺」

「かなあ？」

「じゃあ、始めましょうか？ねえ稲嶺さん。織斑先生」

「ええ」

公式会議は言うほど進まなかった。それほど情報が薄かったのだ。

30分くらいで会議は終了し解散となった。稲嶺もIS学園の方に向おうとしたのだが―、

「稲嶺さん」

「はい？」

突然千冬に呼び止められ千冬のその釣りあがった目に睨み付けられる。

「どうしたのかな？」

「稲嶺さん…、私前に言いましたよね。『生徒達に介入するな』と」

「あつ、うん」

「でも、稲嶺さん。ボーデヴィツヒと繋がっているんじゃないんですか？」

「それは…」

「それとなく分かりますよ。教師ですから。で、どうなんですか？」

「…コメント」

「なぜ、そんな事をしたんですか？生徒達に危険を及ばない様にするのが私達の仕事のはずです」

「確かに…。でも彼女の…ボーデヴィツヒの力が必要なんだ」

「でも…」

「実際、彼女からの情報である程度は分かったさ。レイルが本当は何者なのか」

「あなたは、私の生徒を一体なんだと思っているのですか!？」

「……………」

「あなたも部下が大切でしょ？私も生徒達が大事です。そこは一緒にじゃないですか」

「ふう…、確かに部下は大切です」

「だったら」

「でもですね…。俺はどうしても解きたいんだ。今回の事件を」

「分かりました。では私もこれからあなたの力を借りずに事件を解決したいと思います。どっちが先に解くか勝負でもしますか？」

「…いいや」

それを言い残すと千冬は会議室を足早に出て行った。

19話 その頃の武川

「はあ……」

私服姿で二ツト坊を目深に被り首の後ろにはタオル。いかにも夏の暑さに絶望を感じている立ち姿を

しているのは1ヶ月の謹慎を食らっている、稲嶺の部下の武川たけかわたける（女）であつた。

奈良県十津川村
ならけん とつかわむら

「ええっと……、確かこつちだよね……」

道端に植えられた街路樹の木漏れ日をセミの鳴き声と共に浴びながら首に巻いているタオルで時折、

滝の様に頬に伝う汗を拭く。とても褒めた様な暑さじゃない。尋常じゃない暑さだ。

なぜ奈良県にいるか？と聞かれれば、稲嶺からの言伝ことづてであつた。

「……なあ武川。お前に頼みたいことがあるんだが」

「はい？」

「奈良県の十津川に飛んで欲しい」

「はいい？」

「調べたんだよ。あの立川の故郷だ」

「立川さんって、さっきの……？」

「そうだ。警備部の友達に調べてもらったんだ。そしたら彼の出生証明書に改竄された様な後があるだと。気にならんか？」

「と、言われましてもね！隊長！」

無茶苦茶すぎますよー！個人情報保護法やらなんやら、色々な法律を掻い潜らなきゃいけないのにー！

「あっー！」

ニツト棒を外すと、いつもの癖で頭を大きくくしゃくしゃに掻く。

「んっ？」

「どうかしましたか？」

「いやっ、別に？」

十津川村役場

「ごめんなさい。住民票は個人情報保護法の適用がありました」

「やっぱり…、駄目でしょうか？」

「ごめんなさい」

「あっ、じゃじゃあ」

とカバンの脇にある小さいポケットからくしゃくしゃになったメモ用紙を取り出して役所の人間に見せる。そのメモは奈良に飛ぶ前、稲嶺から受け取ったものだ。

「ここの住所の位置、わかりますか？」

「えっと、はい。それならOKです」

と所員はメモを受け取るとソファから立ち上がってしばらく待つ様にソファで座る武川に指示する。

「よろしく願います」

東京

武川からの第一報を聞いたのは夜の9時ごろの事であつた。武川は軽くシャワーを浴びてから稲嶺と

電話を交わした。

「ん。そうか」

『で、隊長から貰つた住所を頼りにそこへ言つたは良いですがね』

「もう廃墟になつていたのか？」

『いえつ、それが…』

「えつと、すみません。そのような住所は存在しませんね…」

「デタラメ？」

『みたいです。ブラフでも掛けているのか…。それとも』

「ふうん…。そうか…。色々手間掛けさせて悪いな。帰ったら何か奢つてやるよ」

『牛井とか無しですよ？』

「やっぱり？」

同時刻・千冬の部屋

真つ暗な電気すら付いていない部屋の片隅に電話が寂しげに鳴る。

『はい。織斑です。ただいま留守にしております。御用の方は発信音の後にメッセージをどうぞ』

千冬の録音された留守番電話の声の後にピーツと言う発信音が暗い部屋の中で反響する。

『…千冬。私…』

今更ながらオリジナルキャラ設定

レイル・フォッセン

25歳。第2回モンドグロッソ銀メダリスト。

今回の事件の容疑者だが千冬に一回だけ再会したきりでその後の消息は不明。

また、事件を起こした理由も謎。高所恐怖症。

いなみねりゅうち
稲嶺隆一

37歳。自衛隊第6部隊隊長。今回のIS襲撃事件の千冬のサポート役。

非常に頭が切れ、人望や人脈も厚い。

海外PKO活動に幾度となく参加し様々な戦場で兵器として使用されているISを目の当たりにし、

ISに対して一種の不信感を抱いている。生活面はかなり自堕落でご飯はコンビニ弁当。タバコが大好き。

たちかわとしひろ
立川俊宏

48歳。IS特別対策室調査員。稲嶺が参加するまで唯一の男性調査員。

様々な正確な情報を調査会議に提出するなど謎が多い人物で容疑者も彼が一番最初に挙げた。

たけかわたける
武川武

25歳。自衛隊第6部隊隊員。稲嶺の直属の部下で参謀的な存在。武という名前だが女。

千冬と並ぶくらいのクールビューティーでIS学園に派遣された時生徒達に注目を浴びるほど。

ただ、真面目な性格な故にストレスを非常に溜めやすく爆発すると叫びながら頭を掻く。

エミリア・テルビン

26歳。第1回モンドグロッソの銀メダリストで千冬の旧友。かなり態度が大きく稲嶺の事を呼び捨てにする一方で、

武川にはかなり甘く武川を猫可愛がりしている。

20話 邂逅

千冬は部屋に設置してあった電話に録音されていた留守番電話に呼び出されるがままに、

モノレールの車両に1人だけで乗っていた。車窓から望む街の光だけが彼女の視線に映える。

乗客はほとんどいなかった。

もうすぐ駅に到着する、そこである人と約束をしていた。

留守番電話の主と。

「まもなく、到着いたします」

モノレールが駅のホームに滑り込み扉が開くと千冬はホームに立って辺りを見回す。

すると、ベンチで1人寂しく座っている人物が居た。

モノレールがホームから動き始めると千冬はそのベンチで座っている人物に近付く。

「レイル」

ベンチで座っている人物に声を掛けるがその人物に反応は無い。そつと、その人物の肩に手を載せるとすぐにベンチから倒れて――

「…マネキン」

「私はこつちだよ？」

「!？」

声のほうに目を向けると、反対側のホームに見覚えのある人がたっていた。

「レイル…」

レイル・フォッセンだった。

「久しぶりだね。千冬…」

レイルを挟んでレイルが千冬に話しかけてくる。

「どうした？レイル。声が震えているぞ？」

「こりゃ、手厳しい」

「レイル…。お前は何故こんな事をしている？何故だ？」

「千冬…。今この場じゃ説明できないよ…。でも明日なら」

「明日だと？どういう意味なんだ？」

すると、レイルはポケットから携帯電話を取り出して電話を始める。すると今度は千冬の電話になる。

『明日、IS学園の競技場で』

「!？」

『じゃあ私は』

それだけを伝えた途端にモノレールの車両が反対側のホームに滑り込み間髪いれずに車両は発車してしまった。車両を千冬が静かに見送ると後ろから足音が聞こえてきた。

「稲嶺さん…」

「遅かったか。もうちょっとで捕まえられたのに」

「どうしてここに…」

「その辺は立川さんの情報網の強さがね」

「立川さんが私に盗聴を？」

「…どうなんだろうね、俺にもあの人は分かん」

「…稲嶺さん」

終電のモノレールの車両がホームに滑り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6257r/>

IS インフィニット・ストラトス～偶像～

2011年7月16日18時17分発行